



日本よ、今、闘論！倒論！討論！2025第906回

R7/4/22

## 真の日本の独立の道は？

パネリスト：

掛谷英紀（筑波大学システム情報系准教授）

川口マーン恵美（作家）※スカイプ出演

ジェイソン・モーガン（歴史学者・麗澤大学国際学部准教授）

施光恒（九州大学大学院教授）

富岡幸一郎（文芸評論家・関東学院大学教授）

原口一博（衆議院議員）

矢野義昭（元陸上自衛隊小平学校副校長 陸将補）

司会：水島総

\*\*\*\*\*

水島「皆さん、今晚は」

一同「(礼)」

水島「闘論！倒論！討論！２０２５第９０６回目の討論となります。間もなく４月２８日、主権回復の日という日が来ますけれども、今日は改めまして『真の日本の独立の道は？』と問う形で、討論してみたいと思います。皆さん、ご存じのように、もう８０年間、我々の国は外国人、まあ、アメリカ軍が中心ですけども８０年間、所謂、基地を提供するという形で占領状態が続いていると言っても構わないと思います。そういう中で自分達为一体、独立を本当にしているのかっていうことの自覚さえも無くなって来ていると。自民党が立ち上がる時、合同する時、一つは外国軍、外国人の軍隊が撤退する時に備えて自主憲法をつくり、というような形の独立というものを意識してスタートしたはずですけど、その自民党は今や基地撤去というか、基地が無くなるような状態のことも全く意識すら無い。

むしろ、そういう状態を肯定するどころか、しがみついているという形であります。我々は２６００年以上の歴史の中で、外国人の軍隊が駐留したというのは、この８０年間だけであります。そういう意味でも、本当に自分の国がこういうことでいいのか。国家主権とはこういうものかということのを常に問わなきゃいけない。

チャンネル桜が創立したのも、一つはこのことでした。本当の意味での独立を果たす独立国家、主権国家としてのスタートを切る。それが８０年間、今や話題にもなくなってきているんじゃないかという中で、今日、どういう形の独立があるのかということを含めまして、具体的に問うことも含めまして、皆さんと共に、この問題を考えてみたいと思います。

では、ご出席の皆さんをご紹介していきたいと思います。まず、元陸上自衛隊小平学校、副校長で陸将補の矢野義昭さんです。宜しくお願いします」

矢野「宜しくお願いします」

水島「文芸評論家で関東学院大学教授の富岡幸一郎さんです。宜しくお願いします」

富岡「宜しくお願いします」

水島「衆議院議員の原口一博さんです。宜しくお願いします」

原口「はい。宜しくお願いします」

水島「筑波大学システム情報系准教授の掛谷英紀さんです。宜しくお願いします」

掛谷「宜しくお願いします」

水島「そして間もなくお出でになりますけど、九州大学大学院教授の施光恒さんですが、今、少し遅れております。そして、歴史学者で麗澤大学国際学部の准教授のジェイソン・モーガンさんです。宜しくお願いします」

モーガン「お願いします」

水島「そして、今日はスカイプのご出演でございます。作家の川口マーン恵美さんです。宜しくお願いします」

川口「宜しくお願い致します」

水島「はい。というようなことで、今日はこのメンバーでお送り致します。今日は真正面から、日本は本当にどういう状態にあるかということを含めて、お話ししていきたいと思います。皆さんは、この問題についての意識を、どういう立場、ご主張を持っているか、それぞれ簡単にお話し戴いてから、議論に入りたいと思います。では、矢野さんからお願いします」

矢野「最初にお話しするということで、一応、論点を総花的になって拡散するかもしれませんが、私が思っている事を少し列挙してお話ししたいと思います。一番、重要なのは、やはり日本人自身の独立意識というか、これが非常に薄弱であると。それが為に、愛国心とか国防意識が極めて薄いと。この状態を変えなきゃいけないと。77か国を対象にした国際世論調査でも、祖国が侵略を受けた時に武器を持って戦うと答えた国民が、性別とか年齢を問わず一般的には世界平均では5割から6割はYESと答えるんですけども、日本はダントツに低い13.2%ということで77カ国中、最低と」

水島「うん、そうですね」

矢野「こういうことは、いかに、この戦後の特に教育とメディアが、この日本人の意識、特に独立心とか愛国心、国防意識を奪って来たかと。だから、まず、この辺から変えないといけない」

水島「うん」

矢野「教科書の問題もありますし、この日本国民の価値観ですね。押し付けの今の自由とか民主とか人権とか、こういう憲法の基本になっている考えですけども、これが本当に正しいのかと。或いは、日本の国体、国柄に合っているのかと。本当に日本人は、それで生きて来たのかと、こういうところから問い直す必要があると。だから、私は国学とか、明治以降、西洋化をする前の日本の国体思想、或いは伝統的な価値観、道徳観というものを、もう一度、見直す必要があるという風に思っております。

それから二つ目に大事なことは、やはり憲法改正の問題でして、この諸国民の公正と信義に信頼して、我らの安全と生存を保持すると、こういう考え方は正に『諸国民』というのは、これは連合国、戦勝国ですよ。それで連合国に信頼をして生存を確保するっていうことは、これは奴隷の証文ですよ。

これは、正に隷属国家であるということを、憲法の前文に於いて宣言しているに等しいと。だから、これを変えないと、この日本人の独立意識も生まれようがない。それが必然的に九条二項に反映されている訳で、奴隷である以上、武器は持たせないと、これは世界の常識ですから、この武器を持たせないっていうことは即ち戦力の無保持、戦争放棄を言っている訳です。

ですから、この独立心と九条の問題というのは密接に一体になっている訳です。ですから、この構造を破らなきゃいけないということですね。憲法を改正する必要があると。それから3つ目に、それに接続して言えることは、日米安保体制の下での国防の問題ですね。要するに日本人の依存心の根源に、日本が侵略を受けても米軍に頼っていればいいというような依存心が、特に戦後の支配層の中に根強く残っていると」

水島「うん」

矢野「これが日本人の国民性というものを害して来て、まだ、戦前戦中の方が生きている

時代は、それに対して独立しようという意識もあったんでしょけれども、そういう方が居なくなってから、ここ数十年間、もう完全にそういったことが、当たり前になってしまった。むしろ、正義の仮面を被って、それに対して異を唱える者を危険視して、右翼だと言ったりして、そのような風潮を封じていると。独立心を奪う方向に来ていると。

それが、さっき言ったような世論調査の結果になっている訳ですね。ですから自立した国防というものを、何としても取り戻さなければいけない。その為には、私は、その本にも『日本の真の国防4条件』で書いているんですけども、4条件の筆頭は核保有です。それも日本の地政学的条件を生かせる原子力潜水艦に載せるということが必須だと。そうすることによって残存性と抑止力を確保できて、アメリカの核の傘に依存しないでも生存が確保できる、国防が全う出来る。平和を守れると。こういう状況にもって行くことが必要だと。やはり、これが独立の必須条件だという風に思っております。

その為には、やはり技術的にも財政的にも充分、可能ですけれども、これを、やるかやらないかっていうのは、日本国民の意識、それから、それを受けた政治の意志決定ですね。この問題にかかっていると。だから、まず自立国防をやる。その為に核保有をする。同時に日本国民が自ら国を守るということを憲法にも明記し、そして日本国民自身がそういう意識を持つ。

その為には、今の予備自衛官制度、或いは予備役と言っているんですけども、もっとこれを拡充して日本国民自身が自らの責任と判断に於いて、この日本国を守るという体制を創るべきだと。それも殆ど昭和30年以降、論じられてこない。これを国会の場でもしっかり取り挙げて、そして憲法改正と同時に国防義務を義務付けると。

それから、もう一つ大事なことは、国防の基盤を支える日本の自立ということで言うと、エネルギーと食糧の、先進国最低と言っていい極端な依存度ですね」

水島「うん」

矢野「自給率が非常に低いと。これを何とかしなきゃいけない。これについても技術的に、例えば海洋資源を利用するとか、食生活にしても、もっと日本的な食生活に戻るとか、それから人工的な光合成をやるとか、そういった技術的なブレークスルーによって、日本は潜在的に資源大国になれる力が充分にある。特に海底資源のマンガン団塊とか、それから熱水鉱床とか色んな海底資源があるんですけども、これを掘削利用の技術が実用化されれば、日本は充分、資源的にも自立できる国になるという風に思っています。

それから、更に経済とか財政面で言うと、日本は世界一の金満国家って言うか、債権国であって、実は決して貧乏国じゃない。だから、もっと積極的に投資をして、未来の為の投資を積極的にやって、リスクを取っていくということをやるべきじゃないかと。だから、私は、財政のことは専門家じゃありませんけれども、一般の方は今、財務省解体論が出ていますけど、やはり積極財政論を展開していくべきだと。

元々大海軍を、国債を発行してつくった戦前の日本を再現させない為に、GHQが持ち込んだのが今の財政法4条の、赤字国債を発行させないという縛りであって、やはり、これを打破して日本人自身の為、日本の国の為に先人が積み上げた富を使えるような、海外に富をどんどん流出させるんじゃないくて、国内で循環するような体制にもっていくべきだと。

それから金融資本主義っていうのはやめて、日本の伝統的な商いの道、つまり家族的経営ですね。人と人との繋がり、雇用主と働いている人の繋がり、これが家族的な信頼関係で成り立っているような、そういった人本位主義って言うんですか、資本主義じゃない金本位じゃない、人本位の経営というものをやるべきだと。そうすれば日本の経済は再生するということに、私は思います。

最後に情報と対情報の問題で、今、色んな意味で、情報が無いと戦略が立てられないんですけども、情報機関を正常に機能させるには、そのスパイ防止、対情報というのが機能していないと駄目だと。日本にはスパイ防止法すら無い。情報機関も無い。だから戦略が立てられない。戦略が立てられないから自立的な安全保障政策や戦略が国内、内政についても戦略が立てられないということになって、もう政治に一貫性が無い。

絶えず国外からの圧力に受動的に対応するしか出来ないと。こういうことになっている訳です。ですから、この情報の問題、対情報の問題も、しっかり立て直していかなきゃいけないという風に思います。まあ、まだ他にもあるかもしれませんが、一応、そういうことです」

水島「はい。有難うございます。では、富岡さん、お願いします」

富岡「はい、私は文芸評論を書いて来たんですけど、そのきっかけが55年前の三島由紀夫の自衛隊で憲法改正をしろと、憲法改正九条を改正しない限り日本は真の独立国家にならない。独立国家にならないってことは、日本人の単に国防とか経済だけではなくて文化も含めた、ですから一人の文学者であった三島由紀夫が、ああいう拳に出たというのは、正にそういう思いがあったと思います」

水島「はい」

富岡「ですから、あれから55年経って、憲法改正が未だに出来ない。そして、こういう状況の中に陥っていると」

水島「うん」

富岡「私は今、やっぱりチャンスだと思うんですね。ひとつは言うまでもなく、トランプ革命が起こっていますから、もっぱら色々貿易の問題とか関税の問題とかいう次元で議論していますが、やはり、このチャンスは、むしろ日本人が自分の国を自分で守るんだという国防の大きなチャンスです」

水島「そうですね」

富岡「80年代の日米の貿易不均衡の時代ですね。構造協議とか、そういう時代にありました。ただ、あの頃は、やっぱり未だアメリカの中で、所謂、瓶の蓋論的なものがあったと思います」

水島「うん。ありましたね。はい」

富岡「ただ、今、明らかに瓶の蓋論は、もう無いと考えていいんじゃないかと思います」

水島「なるほど」

富岡「まあ、そういう意味では、正に独立核という問題ですね。やはりアメリカの核の傘

があるからってというのは幻想であって…」

水島「うん、そうですね」

富岡「やはり核兵器ってというのは原理的に他国の為には用いない。これは核を持っている国家の当たり前のことだと思います」

水島「そうですね」

富岡「ですから、核を持つかという、まあ、矢野先生がここに書いておられます、日本も核保有を考える時が来たと。正にその時期が今、そういうチャンスが来ていると」

水島「なるほどね」

富岡「ソビエトが崩壊した１９９１年ですね、あの時はひとつの大きな冷戦崩壊で、恐らく日本は真の独立をする為のチャンスだったと思います。ただ、あの時、日本は政治が著しく漂流していました。ですから、そういう大きな歴史の変化の時に対応できずにそのまま来てしまったと」

水島「うん」

富岡「まあ、そういう意味では今、もう一度、このトランプ革命というチャンスを捉えて、独立という道を模索できるんじゃないかと思っています」

水島「そうですね。はい、有難うございます。それでは原口さん、お願いします」

原口「はい。今日も本当に有難うございます」

水島「こちらこそ」

原口「いくつか論点があると思いますが、今、富岡先生がおっしゃったように、トランプ革命ってというのは１００年ぶりの日本へのチャンスだと思うんですね」

水島「うん」

原口「明日、林官房長官と岩屋外務大臣と拉致対策特別委員会、拉致特で議論する訳ですけども」

水島「はい、はい」

原口「全く拉致の問題、動いていないですよ」

水島「動いていないですね」

原口「１９９８年に僕らが１１人で、北朝鮮に拉致をされた日本人を早期に救出する為に行動する議員連盟、行動議連っていうのを創ったんです」

水島「うんうん」

原口「その時は反動右翼と言われ、朝銀に１兆１千億円入れた、それを返せって言ったら、自民党から非難轟々でした」

水島「まあ、そうですよねえ」

原口「ええ。正に今、お二人がおっしゃったように、精神から日本国民を守る、或いは国益を守るっていうことが無い訳ですね。明日、林君に何て言うかって言うと、トランプ革命を手伝えと。何か関税の件でボコられている訳ですよ」

水島「やられていますよね」

原口「昨日、True Social にトランプさんが日本への要求を書いていましたけど、何の交渉にもなっていない。でも、あれは見せ玉ですから」

水島「はい。その意識が大事ですよ」

原口「ええ。あれは見せ玉です」

水島「見せ玉だっていうのがねえ」

原口「本来は中国に合成麻薬のフェンタニルで内側からやられている。それからアメリカの土地も物凄い中国が買っている訳ですよ」

水島「うん」

原口「彼らは、そういったもののカードをつくっているんで、それを今度、逆にウクライナだってそうですよ。お金を止めることによって、そのディープステイトをやっつけようとしているのに、日本は、またお金を出している訳ですよ」

水島「それは、そこ、ちょっとねえ…」

原口「ええ」

水島「殆どメディアが報道していない」

原口「ああ、ほんと、そうです」

水島「6千5百億円でしたっけ」

原口「はい」

水島「ね。更に追加ですよ」

原口「そう」

水島「この間の1兆3千億でしたか」

原口「ええ」

水島「原口さん、聞いたねえ」

原口「ええ」

水島「あれから…」

原口「1兆7千億円です」

水島「7千億円か」

原口「あれから、もう2年経って2兆2千億円プラス、また6千5百億円だから、もう、3兆円ですよ」

水島「これ、みんな、殆ど知らないですよ。ねえ」

原口「知らないし、トランプさんはゼレンスキーにカードを持たせてあげるって言うんで、あのレアメタルと一緒に掘ろうとやったけど、あんな無礼な態度だったでしょ」

水島「うん」

原口「今、止めているんですよ。ところが、もう、全く、ここに丁度、80年前の、私の遠縁になるんですけど、佐賀選出の国会議員の書があるんです。これは真崎甚三郎っていう、社長…」

水島「ああ、有名なね」

原口「ええ、陸軍大将で、僕は遠縁ですけど、その弟の海軍少将の真崎勝次っていうのが80年前の僕の選挙区の代議士でした」

水島「う～ん」

原口「何て書いているかって言うと、正に矢野先生がおっしゃった通り、日本精神を失って、これは戦争が終わったあとに書かれたやつですけど、何故、負けたかということ、よく聞かれると。負ける戦争だったから負けたのだって答えている訳です」

水島「うん」

原口「支那事変で4年、もうボロボロになっているのに、それこそ東に行くと。そんなこと軍の中じゃ考えていないんですよ」

水島「うん」

原口「戦略も考えてないものを、誰かが抜け駆けしている」

水島「うん」

原口「今回も全く同じですよ」

水島「うん」

原口「それと財政のことについても一言、言っておきたいですが、これを映せますかね。消費税です」

水島「はい、大丈夫でしょう」

原口「さっき、あのう、あっ、消えた、あっはっはっは、財政法4条の話があったけど、この4条は無くさない駄目です」

水島「駄目だね」

原口「それから消費税は日本弱体化装置だから、もう、これを外すしかないんですよ。これも殆ど伝えられていないけども、同じ売り上げ、同じ仕入れ額、同じ従業員、経費の会社でも業態によって違うんですよ」

水島「うん」

原口「輸出企業は逆に300万円、還付するんですよ」

水島「還付できるねえ」

原口「還付」

水島「うん」

原口「非正規を雇った企業は、正規を雇っている企業よりも消費税が半分で済むんです」

水島「うん」

原口「これ、正に日本弱体化装置なんですよ」

水島「うん」

原口「それで、どんどん非正規が増えていって、そして挙句の果てには少子化で、去年、日本は160万人、減っていますからね」

水島「う〜ん」

原口「あのYouTubeで言えない例のやつも大きく影響している訳ですけど、やっとホワイトハウスがラボリックを致しましたね。だから、これも大きな事ですけど、やはり、殆ど情報鎖国の中にあって、そして日本を独立させようとか、僕は『日本独立!』という本の中で大和心に戻れと。愛国に戻れということを行っている訳です。

お陰様で289の小選挙区に憂国連合というのを創って日本独立、日本再興、消費税廃止一択です。今日も今、裏で、うちの党も消費税をどうするかとかやっているんですよ」

水島「そうだね（苦笑）」

原口「でも、これも矢野先生がおっしゃっているように、日本は世界最大の債権国ですよ」

水島「いや、全くそうなんだ」

原口「これだけのお金を持っている国が、しかも、この消費税も外国人、悪い外国人ですよ。ジェイソン先生のような方じゃなくて。モーガン先生のような方じゃなくて。これが悪用されているんですよ。輸出しますよと言ったら、まず還付金をくれる訳です、証文です。それで銀行に行って、お金を借りて、それで輸出企業を創りました。あとドロンしているんですよ。

これって日本人が外国の悪い人達にお金を移転しているようなものです。それから殆どの大企業は外国人が株主じゃないですか」

水島「うん」

原口「せっせ、せっせと働いて、それは貧しくなりますよ」

水島「うん」

原口「それから土地もそうですね。今度、超党派で土地の先買い、丁度、15年前に国家試験三法っていう法律を創ったんです。領海法の改正、それから国境離島の振興法、それに土地の先買い。僕らは中国の土地を買えませんからね。だけど日本の土地はいくらでも買えるでしょ。おかしいじゃないですか」

水島「うん」

原口「最初だから、これで最後にしますが、もう一つは人です」

水島「うん」

原口「この間も申し上げましたけども、何と9歳未満の子供達が1115人も行方不明です。18歳未満が1万7千人、行方不明の届け出が出ています。昨日も警察庁とやったら、いや、85%は帰って来ていますよと言う訳ですよ。じゃあ、残りの15%はどうなっているのと。色々調べてみると、外国人の犯罪組織に狙われていて、日本人は知能の話をすると差別主義者みたいに言われるけれど、あのう…」

水島「まあ、記録だと世界の中で凄く高いんですよ」

原口「そうです。だから高く売れると。だから内側から侵略されているんです」

水島「うん」

原口「核の問題については、僕らは、もう次の時代をやっていて、オレシュニクっていうのは核を使わなくても4千度でやれますね。それから私は情報通信担当大臣だったけど、こういうコンピュータに入れて、今回、やっと能動的サイバー攻撃…サイバー防護っていうんですけど、本当はサイバー・アタックが出来る。それが通りましたけど、やっぱりサイバーの力をやるしか無いです。やっと出たので、これをご覧になれますか。ちょっと、これ（苦笑）」

水島「はい（笑）」

原口「見えるでしょ」

水島「はい」

原口「ね。A社、B社、売り上げ、仕入れ、経費、人件費、利益、全部、同じ。だけど、A社は真面に正社員を雇っていて、これは200万円の消費税です。B社は海外に輸出しているからって言って、アメリカは5州ぐらいは消費税が無いですよ。だからトランプさんが関税障壁だって言う訳です。今、これはチャンスです。それから、C社は全員、非正規の社員」

水島「うん」

原口「そしたら消費税、半分で済むんですよ」

水島「うん」

原口「みんなが貧しくなるに決まっているじゃないですか」

水島「うん」

原口「だから、労働組合も、やっと、これに気づいて、消費税廃止を言う所が増えてきました」

水島「うん」

原口「だから、これは弱体化装置ですよ」

水島「うん」

原口「これを取りたいと思います。宜しくお願いします」

水島「今、原口さんが言ってくれた還付金の問題は、前から言っているんだけど、経団連が１２％にしろとかって、上がれば上がる程、彼らのところは大体、輸出企業だから、みんなねえ、戻って来るっていうのは前から言われていたんだけどね。この今のグラフっていうか何て言うか表と言うか、これは歴然としていますよね」

原口「歴然です」

水島「真面な会社は苦しくなるっていうねえ」

原口「はい」

水島「こういうことが行われているっていうことも、皆さん、よく踏まえて戴きたいですね」

原口「だからトヨタとかの往年期の１９８９年は７５０万台ですよ。でも、こういうことをやるから、みんなの所得が下がるから、今、３９９万台ですよ。だから、僕は豊田章一郎さんに可愛がって貰ったから、トヨタも消費税、反対運動したらどうだと」

水島「本当にそうですよ。それと今日は国会議員さんが一人なので、伺いますが、何故、あの野田という人があんな頑固に増税論を言うんでしょうか。今、政権を取るなら逆の主張をすれば、本当に一発なんだけどねえ」

原口「一発です。丁度、今、それでカンカンの殴り合いの喧嘩になるようなことをやっているんですよ」

水島「ああ、ねえ」

原口「立憲以外の党は全部、減税ですよ」

水島「うん。本当に、みんな、言い出しているよね、うん」

原口「ええ。そう。自滅です」

水島「ね」

原口「まあ、ある意味、これは消費税利権です」

水島「うん」

原口「国会議員は、最大権力の財務省に阿っていた方が選挙は通り易いんです」

水島「うん、うん」

原口「各州でお代官様がいるから」

水島「うん、そうだね、今、そうだよ。うん」

原口「だから、それをどう壊すか。特に外為特会ですね」

水島「うん」

原口「外為特会、今、１８９兆円もあるんですよ」

水島「そうですねえ」

原口「それで為替介入とかしたって、アメリカに、どうでしょうかって言って、アメリカに最初、情報が行く訳ですよ。それでトランプさんは、これが関税障壁だって言っているけど、これはアメリカへの最大のプレゼントですよ」

水島「いや、ほんと、そうですよ」

原口「ええ」

水島「それでねえ、まあ、だから、今言った減税の問題も含めて、今の日本政府が非常に日本の政府じゃなくなっているっていうね」

原口「うん」

水島「はい。ということを含めて聞いてみたいと思います。掛谷さん、お願いします」

掛谷「はい。矢野閣下の方から、さっき予備役の話が出て来たんですけど、私は１０年、務めまして、これを戴きましたっていうことで、御存じの方も多いかもしれませんが、実は予備役は今年度から待遇が物凄く上がります。２．５倍ぐらい色々な手当が増えるので、私はお金の為にやっている、ああ、そうなった訳じゃないですけど、結構、２．５倍で手当が増えた額になったので、是非、応募して戴ければなというぐらいに思いますので、まあ、ひとつです。

それで、もう一つ、これも矢野閣下から情報機関の話がありました。原口先生からコロナの起源の話とか、まあ、この二つの話を、私の専門性がある話でもあるので、正に２０２０年から、この番組でコロナが研究所起源だっている話を、塩基配列をベースにして色々な話をさせて戴いたのが最初だったと思うんですけど、最近になって色々な国の情報機関が、もう２０２０年のかなり早くの段階から研究所起源だっていることを掴んでいたということが一気にバァッと出て来ましたね」

水島「うん」

掛谷「ドイツの情報機関も２０２０年のかなり早い段階で８０％から９５％、これは研究所起源だという情報を上にあげただけで、メルケルが握り潰したと」

水島「うん、うん」

掛谷「或いは、アメリカは元々ＦＢＩとかエネルギー省が言っていたのが、ＣＩＡがラトクリフ（John Lee Ratcliffe）長官になって、今年、かえて、まあ、あれなんです、実はラトクリフが長官になる、もう去年の段階で研究所起源だっている結論が出てただけで、結局、それを隠してた訳ですね」

水島「そうですね」

掛谷「あとは、アメリカは情報機関が沢山あるので、D I Aですね。軍の情報機関が、かなり情報を持っていて、やっぱり研究所起源という、軍自体がそもそも、だから2019年の段階で、所謂、幕僚の部分のブリーフィングで、どうも中国で研究所からウィルスが洩れたらしいということを、もう10月11月12月とブリーフィングをしていたと」

水島「うん」

掛谷「内部リークが段々色々出て来たと。カナダも、どうも2019年の10月に世界軍人競技大会が武漢であったんですけど、そこへ行った7人が、コロナのような症状を見せていたというようなことを軍が掴んでいた。やっぱり軍の情報機関が掴んでいた。だからイタリアも、情報機関がロシアとかフランスから中国から情報を取って、どうも研究所起源らしいっていうことを言っていたと」

水島「うん」

掛谷「ということで、イギリスのM I 6は2020年の3月から言っていた。これは、今、G7の国で日本以外、全部、出て来ましたよね。つまり、私は、この話は2020年の早い段階から、これに気が付き始めて、おかしいってことで…」

水島「うん。前から言っていたよね」

掛谷「もう多分、10人ぐらい国会議員の方には話しましたし、あとは自衛隊関係とか、情報機関もいくつかのところにコンタクトを取りましたけど、日本は本気で何も解っていないさそうでしたよ（苦笑）」

水島「そうだと思いますよ、はい」

掛谷「はい。全く何も知らない。だから日本は頭脳が無いんですよ、完全に今（笑）」

原口「（笑）」

掛谷「それこそ海外は、判っていて隠していたんですよ」

水島「うん」

掛谷「だから、ちゃんと情報機関はそういう情報をあげているけど、政治判断で、それを隠した。まあ、それも、どうかと思いますけど、判った上で隠すのと、本当に判っていないのがG7で日本だけだったんですよ」

水島「うちは本物の馬鹿っていうねえ。うん」

掛谷「ええ。これは本当に恐ろしい事で、やっぱり、この今の日本の脳みその無さ具合。更に、これは政府レベルですけど、じゃあ、民間レベルでどうかって言うと、実はコロナは研究所起源じゃないかっていうのを、私みたいな在野で分析している人っていうのは、世界には結構、居ました」

水島「うん」

掛谷「研究所起源じゃないかって言っていたグループが、私も属していた研究者のグループのパリグループというのと、もう一つはドラスティックっていう名前のインターネット

で情報を集めるのが得意な人達が集まったグループがあって、だから、そういうのを民間でシーンとやっているような感じですよ。そういう人達はかなり色々な情報を掘り当てて、それこそ2012年にどうもモジャマインって言って、何だ、だから、まあ、廃銅山ですね。日本語で言ったら何省になるのかな。南の方で、そこで、どうも、そのコロナのような症状で6人ぐらいが感染して、3人が亡くなったと。そのウィルスを武漢ウィルス研に持ち帰っていたみたいなのを、中国語のものを色々分析しながら、それ、だから公開情報を色々探り当てて、そういうことを分析している人達が居たんですね。

だけど、結局、そういうことすら出来る人って日本には居なくて、だから、結局、在野でやっていたのは、私一人だった訳ですよ。だから、そういう情報を色々分析するという文化そのものが、ひょっとすると日本には無いっていう可能性もあって、もう、このままでは脳みそが無い状態だったら、独立も何も無いので（失笑）」

水島「う～ん、いやいや…」

掛谷「これは本当に何とかしないといけないということです」

水島「いやいや、その通りですよ。」

掛谷「実は、うちでは4月から情報機関の社会人学生を受け入れたりして、とにかくそこを変えていかないことにはどうしようもないっていうのはありますね。だから、うちは、そういうのをどうやって興味を持って貰うかっていう話で難しいところですけど、まあ、私なんかも研究起源の話をしていても、学生は全く興味が無いし、いや、そんなことが判っても何か儲かるんですかみたいなレベルですよ（笑）。だから、最近、結構、論文もようやく情報規制が外れて、私はオミクロン株も人工だと思っていて、実はその論文が一個、最近、査読が通ったんですけど、段々そういうことが出ていて、査読を通ると学生が何か、先生の言っている事、陰謀論と思っていたけど、それまでホワイトハウスも発表したんで（笑）、そうじゃないかもしれないっていう中で、最近、ようやく、私、唯一、学生に褒められたのが、この前、結局、関税の話がさっき出ましたけど、まあ、関税は、日本のマスコミが何かトランプは気が狂ったみたいな報道をしていましたけど、もう常識的に考えて中国標的って解るじゃないですか。

最初から中国だけ関税を上げるって言うと、これは建前上、拙いから、全部に上げるって言ったら、中国だけがプライド高いから頭を下げずに、他の国が下げるから、結果的に中国だけ関税が上がる状態をつくる戦略だって、私は学生に言っていたんですが、だから株価がばあ～っと落ちているけど、今が買い時のチャンスだよっていう話をしたんですよ。そうしたら、その通りになって、まあ、人間、お金が絡むと、やっぱり興味を持つみたいで（笑）」

一同「（笑）」

水島「うん。なるほど。その通りですね」

掛谷「いやあ、掛谷先生、初めて凄いいましたって言われましたけど（笑）。そういうところからお金にも繋がるどころから、そういう世界の情報を分析すると、まあ、そういうようなメリットもあるよなっていうところで、その日本のインテリジェンスというかシグント（C I G I N T=signals intelligence）的な分析力の底上げを図らないといけないんじゃないかなあと。それが、やっぱり独立の為に、まず最初の第一歩かなあとって

います」

水島「それは非常に大事な指摘でねえ、馬淵さんとの対談の番組をいつもやっているんだけど、今日の収録でそこで我々の意見が一致したのは今、その問題で、一つは関税、関税ということをやっているけど、実際の標的は何の目的でやっているか、おっしゃるように中国、でも、それと同時に、それも、また、もう二重あってFRB」

掛谷「ああ。はいはい、はいはい」

水島「そこまで狙っているって言って」

掛谷「はいはい」

水島「だから、実はつまり物凄い戦略を立てて、でも馬鹿みたいなことを言って、ボーリングのボールがボォ〜ンと当たったら何とか、とかやってね」

掛谷「(笑)」

水島「ああいうフェイク話でね、あいつはとんでもない、おかしい奴だみたいなことになっているけども、現実には今、流れているのはアメリカの経済だけでなく、世界経済の在り方、FRB中心のそういうものの在り方まで変えようとしている。その一番の標的が中国だしね、その辺のところを外交当局が判っているんですかねって言ったら、いや、全く掛谷さんと同じで、外務省や政治家も殆ど解っていないんじゃないですかと。彼が言っていた。やっぱり、この話を出しても、我々の中では通じるけども、外務省には通じない。

だから無脳、頭の脳の脳無し状態が、科学者だけでなくね、そっちの外務省まで行っているっていうねえ、この辺のヤバさは凄くあるっていうね」

掛谷「ただ科学者の場合は前もお話しましたが、実は、判っているけど、損になるから言わないパターンが多いんですよ。前も言った通り、新型コロナの研究所起源っていうのは、国立感染研が最初に塩基配列を見た瞬間から彼らは判っていたんです」

水島「うん、言っていたね」

掛谷「だけど、それを言うと、研究費が削られるとか色々問題がある、研究の規制が強まるから緘口令を布いて、みんな黙った。だから科学者は、いや、私はコロナが研究所起源だという話を学会でブレイクタイムズの時に聞いたら、殆ど、みんな、解っていますよ。

解っているけど損になることは言わないって、それだけです。だから科学者は頭がいいけど、魂が汚れているっていうのが科学者ですね(笑)」

一同「(苦笑)」

水島「外務当局の方はね」

掛谷「本当に解っていないですか」

水島「そういう戦略的な分析まで出来ていないと。トランプは変わった人だっていうね。こういう人格の問題とかに、みんな、解消しているっていうねえ、非常に拙い…」

原口「中国共産党がですよ」

水島「ああ」

原口「中国共産党がグローバル経済を守れと言っているんですよ」

掛谷「(笑)」

原口「普通、おかしいと思うんでしょう」

一同「(苦笑)」

水島「普通はね(笑)」

原口「ね(失笑)」

水島「真面な人はそう思うんだけど」

原口「何故、中国共産党がグローバル経済の先頭に立つの」

水島「自由貿易を守れとかね」

原口「ええ」

水島「何故、彼らが言っているかっていうねえ、ただ本当に今の指摘通りで、日本の政治家の方自体は自由貿易を悪くないんじゃないのと、今迄、やって来た。それをトランプが、ちょっと変な形でね、管理貿易とか何とかやっているんじゃないのみたいな意識は、未だ凄くあるんでね。原口さんが言ったことは本当に…」

原口「明日、それを林君とやります」

水島「そうですね。やって下さい」

原口「End the Fed! です。フェッドを終わらせるっていう話だから」

水島「そういうことだよね。はい。有難うございます。では施さん、お願いします。改めまして紹介致します。九州大学大学院教授の施光恒さんです。宜しくお願いします」

施「はい。どうも宜しくお願いします」

水島「ということで、今、どんな見解を持っているかっていうのを聞いています。はい」

施「ああ、そうですか。ちょっとお話との関連ですけれども、いや、私も何て言うか日本の色んな分野で、やっぱり頭脳が無いというような状況というのは(苦笑)、非常に思うんですね。何て言うかな、例えばトランプ政権の今の関税の話の一つとって見ても、日本は、左派も自由貿易を守れとか、また訳の解らないことを言っていて(苦笑)」

一同「(笑)」

施「例えば連合とか労働組合も何か自由貿易を守れとかって言っていますよね、何か関税反対で。いや、あのう(笑)、立憲民主党も言っていると思うんですけども…」

原口「いや、立憲民主党も変わった人が言ってますから」

一同「(苦笑)」

施「ああ、そうですか。はい（笑）、勿論、トランプでやり方っていうのは、あまりにも、ドラスティックな所があってというのは勿論、解るんですけども、ただ、基本的には、今迄、この30～40年間、ずうっとやってきたことは、新自由主義の流れですね。これっていうのは、ディープステイトと呼ぶかどうかはともかく、グローバルな企業、グローバルな投資家に有利なように、そして各国の一般庶民と言いますか、各国の国民、一般国民にとっては非常に不利な状態をつくり出して来たというのは、もう間違いないと思うんですね」

水島「うん」

施「トランプ政権は、やっぱり色々な人達が居ると思いますけれど、やはり一つの新自由主義的なものを改革していこう、変えて行こうという保守のグループっていうのは、あると思うんですね。私は結構、副大統領のヴァンスとかには結構、期待していますけれども、あの辺りの人々っていうのは、そういう風に今迄のこの新自由主義の流れをどうにか変えて、もうアメリカの庶民がアメリカの中心になれるような形に、もう一遍、そういう風に取り戻していこうという、グローバル企業、グローバル投資家で、それに操られているというか、その影響を物凄く受けている政府の政治のやり方ですね。それを変えて行こうというのはあると思いますし、その一つが関税ということだと思うんですね。

関税というのは、言ってみれば何て言いますか、所謂、自由貿易という言葉、美辞麗句を、一種の隠れ蓑にして、ある種、グローバル企業、グローバル投資家にとって非常に有利な体制を作り上げているんですね。関税が悪だみたいなのが今の日本の報道ですけども、この各種の日経新聞を始めとして、だけどそんなことないじゃないですかと。戦前の日本の日露戦争までの外交っていうのは、関税自主権の回復でしたよねえ。

ですから関税っていうのは、国造りの為には必ず必要ですね。これはアメリカもイギリスも日本も、元々は関税をかけて自分の産業っていうのを大きくして来た訳ですね。関税っていうのは、他にも国内の不平等、不公正さを是正する為にも必要な訳ですね。

今は正にグローバル企業、グローバル投資家みたいな一部の各国のそういう人達が儲けるようなシステムが出来てしまっていると。例えばアメリカなんか正に製造業、かつて中産階級を支えていた製造業の人々とか一般庶民は、もう物凄い低賃金に喘いでしまっている。

そして、どんどん仕事が国内に無くなっていると。だからアメリカも、日本もそうですが、産業構造がはっきり言って、もうむちゃくちゃになっちゃっているということですね。そういうのを立て直す為には、やはり、ある程度、きちんと各国が国造りを踏まえて、関税をかけていかなきゃいけないと。

そして国ごとの交渉によって、フランスの知識人のエマニュエル・トッドとかが昔から言っていることですが、ある程度、やはり二国間の交渉の中で関税、うちは、ここを守るが、ここは開くと、あんたのところは守っていいけど、こっちは開いて下さいみたいな感じで、それで交渉の中で、お互いの国造りと国際関係というのをつくっていくというのが、実は新自由主義以前の国際経済、国際政治の常識だったと思うんですね。

ですから関税が一概に悪だっていうことは正におかしな話であって、これは日本の保守、アメリカの保守もそうですが、やはり保守は今のグローバル経済の下では、勿論、関税だけじゃなくて保護貿易一般ですけども、ある程度、今のトランプ政権の、まあ、

所謂、このリフォーモコン（Reformocon）とか新しい保守って言われるようなグループっていうのは、産業政策を一生懸命、やっていこうっていうことを言っているんですね。

だから自由放任、所謂、新自由主義的な経済運営ではなくて、まあ、ある程度、保護貿易的なものも入れていく。尚且つ、産業政策というのもきちんとやっていこうと。だから、どの分野っていうのが、ある程度、補助金とか出して育てていくか。そして大企業で技術革新が起こったものを、どう中小企業とか地方に広げていくか、そういうことを、きちんと考えていこうと。

ですから、この前、日本に来ていましたけれども、国際交流基金の招きで、トランプ政権のブレインのオレン・キャス（Oren Cass）という人が来ていたんですね。これは、朝日新聞とかもインタビューで載っていましたけれども、4月3日だったかな。オレン・キャスとかが言っているのは、そういう風にオレン・キャスとかマイケル・リンド（Michael Lind）とか、そういう新しい保守のグループでトランプ政権で結構、力を持っている人達が言っているのは、ちょっと変な話ですけど、正に昭和の日本の調整型の政治ですね。

ある程度、関税をかけて伸ばすべき産業っていうのを伸ばしていくと。政府が技術革新を支援する為に重点分野を絞って投資していく、あと、政府系金融みたいなものをちゃんと整備して中小企業を守っていくとか、そういうようなことをやって、彼らがやろうとしているのは、家庭とか地域社会っていうのが、ちゃんと維持、発展できるような雇用をアメリカに取り戻そうっていうことですね。

それによって、まあ、これは保守のテーマだと思うんですね。家庭と地域社会というのは、どの国の文化伝統っていうものも、家庭と地域社会があって初めて過去から次世代に受け継げる訳ですので、ですので、そういう意味では保護貿易にしても、その産業政策にしても、やっぱり国造りの精神っていうのを、もう一遍、経済の面でも取り戻していけないといけないと思うんですね。

だけど日本はそこも全く見えていなくて、労働組合とかが自由貿易だとか言っているのは、また、もう訳が分からないというか、ですからトランプ政権の、個々の関税の関税率というのは色々交渉の余地っていうのは勿論、沢山あると思いますけれども、だけど日本も、ああ、そうだよなって、日本も庶民が、やはり日本の一般庶民が日本の中心となれるような経済ですね。そういうのを取り戻す為に、投資で国を資産運用立国とか馬鹿なことを言っている場合じゃないよと。

コソコソと真面目に働いた人達が、ちゃんと食って子供を大学まで出せるような、何かそういうような、きちんと、そういう、まあ、別に大学を出さなくてもいいですけど、ちゃんと家庭を持って子育てが出来るような、そういう経済環境っていうのを創り出す為に、政府がある程度、調整していくんだと。

そういうこと出来るような国際経済システムっていうのを、もう一遍、つくり直そうと。だから、これはトランプ政権の人達もどれくらい解っているか判らないですけど、今のままアメリカだけで、このグローバルな今の新自由主義秩序を変えようとしても中々難しいですね。やはりアメリカからも資本流出が起こり兼ねないと思うんですね。アメリカはデカいから、そう簡単には一国だけでも、かなり出来ると思うんですけど、だけど、やはり、各国の反グローバリズムの政党と連携していかなきゃいけないと思うんですね。

ですから、例えば、トランプが最初に会ったのは、あのメローニですねえ。イタリアのメ

ローニとかですね。まあ、ヴァンスがドイツの為の選択肢とかと色々連携しようというところがあるのかもしれませんが、そういう形で、きちんと各国の反グローバリズム保守の連携をつくって、それによって、それぞれの国で関税をかけるというのは、国造りの為に必要だろうと。

そういうことは出来るだろうっていう、国際経済秩序枠組み自体を作っていくと。そういう流れに、実は日本は、そっちで頑張っただけ欲しいと思うんですけども、石破政権の方は、その点はあまり期待できないと。その点ですけど、他の点も期待できないですけども」

一同「(苦笑)」

施「だから何かそういう風なことを考えて、正に日本のそういう独立ですね。そういうのを、そうしたら日本の庶民が中心となれる経済をつくると。そういうことをやって行くべきではないかという風に思います。すみません、ちょっと最初から喋り過ぎました。有難うございます」

水島「はい。有難うございます。丁度、今、指摘があったんですけど、アメリカが関税を始めたのは、もう一つ、大事な点だと思うんですけど、実は所得税を導入した年と全く同じですよ。まあ、みんながトランプは何かおかしいことを言っているって言うのは、関税を増やして関税収入で所得税を無くしていくっていうね、これ、丁度、FRBが所得税を導入させた、そういうアメリカの構造そのものまで、実際、私は別の番組で言っているんだけど、トランプは、もう、そこまで戦略的に考えているっていうね。

だから我々の国も所得税を、まあ、累進課税があったんだけど、どんどん貧乏人からふんだくる。この間、経済討論をやった時、産経の田村さんが世界の中で日本は無税になるのが120万ぐらいですか。ところが欧米は殆どが250万以上。我々の国はもう貧乏人からどれだけふんだくっているかね。そういう話を彼が指摘していましたけれど、そういう意味で言うと、我々の所得税の累進課税も無くなっちゃったし、今言った、その関税と所得税という、この構造そのものをFRBがつくってきた金融とか財政のシステムを、だから実際、中国攻撃と同時に一緒にやっているっていうかね、むしろ本丸はそっちじゃないかっていうねえ。この4年間で、ディープステイトの本丸を調整しようとしているんじゃないかみたいなね、そんな感じもあるんですけどね。

おっしゃるように、そういう意味で関税の問題っていうのは、本当にもう少し我々が知った方がいいかなあっていう気がしているんですけどね。はい。ではモーガンさん、お願いします」

モーガン「はい。有難うございます。いつも誘って戴いて有難うございます」

水島「いいえ、こちらこそ」

モーガン「今日のテーマは、皆様もそうですけれども、本当にもう長年、私が頭を抱えて考えて来たテーマの一つです。私の結論から言うと、この日本が独立できないっていうのは、やっぱり様々な構造的問題があると思います。そういう構造はどういうものかと指摘してから、何をすればいいかと、いくつかのアイデアを、最後に提案させて戴ければと思います。

実は今月14日に非常に奇妙なメールが私の受信箱に入ってきましたが、それが長島昭久

という政治家から入って来るメールです。個人のではなくて、メールマガジンみたいなものに登録していて、長島さんが私に直接、連絡している訳ではないんですけども、4月15日の、確かBSフジの放送を見て欲しいと言うので、気になったのは森本敏元防衛大臣とケヴィン・メア（Kevin K. Maher）という人、まあ、アメリカ人ですが、その3人が、BSフジに出演するっていうことなので、私はその動画を観ました。確か、オンラインで検索すれば観られるかと思います。

私が観たのはテレビではなくてYouTubeの動画ですけれども、やっぱり、先程、ご指摘があったんですけども、情報鎖国ですね。もう日本のメディアは殆どプロパガンダです。殆ど嘘です。脳みそが無いとか、私は、ちょっと違うと思います。日本人は脳みそが充分あると思います。但し、上の層、エリート層は道德観が無いです」

水島「うん」

モーガン「これは腐敗問題です。これは頭の問題じゃなくて、やはり魂の問題だと、私は思います。その長島さんという人は元安全保障補佐官だったとか、アメリカのワシントンにベッタリですね、ベッタリ。ワシントンに抱っこされているかのような、おんぶされている訳です。森本もそうですけど、気になったのはケヴィン・メアですね。外国人です」

水島「うん」

モーガン「そもそも、もし、この国にスパイ防止法があれば長島っていう奴が、その場で逮捕される訳です」

水島「うん」

モーガン「日本の政治家が平気でテレビに出て外国、しかも敵ですよ。この国を占領している奴と一緒に出演する訳です」

水島「うん」

モーガン「想像してみてください。外国人が中国人であれば凄い騒動になるじゃないですか。でもアメリカ人だから免除。それはおかしいですよ。そもそも、何故、敵と一緒に、日本の政治家と。その人は、ただの外国人だけではなくて、元米国務省日本部長だったですよ、あの人は」

水島「はい、そうですね」

モーガン「因みに、アメリカの大使館はCIAの牙城です」

水島「うん」

モーガン「ケヴィン・メアがCIAと言っている訳ではないですけども、あの大使館はCIAのパラダイスですよ。ああいう人間が長島さんと一緒に出演する訳で、スルーされる訳ですよ。シーンとする。そのケヴィン・メアさんって、どういう人かと言うと、2011年『沖縄人が強請の名人だ』と日本国民を侮辱した訳ですね。その時のルース（John Victor Roos）大使と騒動になって大騒ぎになりました」

水島「うん」

モーガン「私が今迄、会った、国務省の人の全員と言ってもいい程、日本人を馬鹿にして

います。見下しています。さすが、あそこのワシントンの人間だなあと。私は、その番組を観ていました。メアもそうだったんですけれども、日米合同作戦とか強調する訳で、長島は、うんうんと頷いていて、森本はもっともっと協力したい。メアを上回る程、もっともっと売国奴的なことを言っていて、非常に奇妙なことを私は観ていると。しかも、あの長島が傲慢だと、観て欲しいって。恥ずかしい所を観て欲しいって」

水島「うん」

モーガン「その番組の中で石破さんの言葉も出ていたんですけれども、例えば『日本は、米国に基地を提供する義務を担っているが、一方的に米国が日本を守っているという関係ではない』と」

水島「うん」

モーガン「あと、これが今年3月の発言だそうです。エルブリッジ・コルビー（Elbridge Colby）さんっていう国防次官が、日本の防衛費を国内総生産の3%まで引き上げて欲しいと。石破総理が『日本の防衛費は日本が決める』『他国に言われて決めるものではない』と。主権国家のふりをしている訳です。長島もそうでした。しかも日本を完全に支配している国の人がその片割れに座っていて、この人がこの会話をコントロールしている、構造的にも」

水島「うん」

モーガン「この政治家達は、日本が主権国家のような立場を執って、これは真っ赤な嘘だと。そもそも、何故、このメアと一緒にいるかと、私は本当に不思議だと思っていて、トランプが持っている日米同盟に関する見解は、時代遅れとメアが言っていたんですけれども、私からすればメアの様な人間が時代遅れです。白人が500年も提唱して来た帝国主義、植民地主義、あれこそが時代遅れじゃないですか」

水島「うん」

モーガン「あのメアが、その番組の席に座っていること自体がおかしいです」

水島「うん」

モーガン「アメリカの政府の人が未だに日本を支配していて、やっぱり、この日本の売国体制は構造的だなと思いました」

水島「うん」

モーガン「あの政治家だけじゃなくて、もうメディアも政治も日米同盟とか、もっと奇妙なこと、もっと悲しい事。長島昭久とメアも防衛関係の研究所に関わっています。長島は顧問です。メアは特別顧問です」

水島「おお…」

モーガン「アメリカ人の肩書の方が、日本人を上回っている訳なんですよ」

水島「うんうん」

モーガン「その防衛関係研究所の名簿を見れば、拝米保守オンパレードです。岩田清文は

特別顧問。元幕僚長ですよ。武井智久も海上自衛隊の元幕僚長。稲田朋美っていうレインボー・プリンセスですね」

一同「(笑)」

モーガン「エマニュエル総督の政治的女中だったですね。あの人は、もう完全に売国奴です。もしスパイ防止法があれば、あの人は先だって逮捕されると思います。高市さぎえっという…あ、失礼しました早苗衆議院議員と」

一同「(苦笑)」

モーガン「有村治子参議院議員。有元隆志は元正論の人ですね」

水島「うん」

モーガン「国基研にも関わっている。島田和久元防衛事務官と。兼原信克が顧問とか。もう拝米保守オンパレード」

水島「うん」

モーガン「しかもジェイムズ・アワー（James E. Auer）という人が永久顧問の一人です」

水島「ああ…」

モーガン「私はジェイムズ・アワーと会ったことがあります。人間はいいですよ、ジェイムズ・アワー。でも敵の軍隊の人間が永久の顧問、まあ、亡くなった方ですね」

水島「うん」

モーガン「森本は、もっともっと米国と協力したいと言っていて、例えば日本がパトリオットを製造して、それをウクライナに送ればいいという風におっしゃって、ご覧になって下さい。凄いことをおっしゃっていたんですよ。北大西洋条約機構の人々が日本を見て認めていると。この自慢話をして、この国が独立すれば、凄い課題が残っているなあと思いました。あのNATOのマルク・ルテ（Mark Rutte）北大西洋条約機構の事務総長が今月、日本にやって来ました」

水島「そうですね」

モーガン「石破総理大臣にも会いました」

水島「うん」

モーガン「あと中谷元という防衛大臣。4月8日に会いました。中谷元も防衛関係の研究所の顧問です。横須賀基地まで行って、海上自衛隊の人々とも会いました。やはり、日本はワシントンだけではなくて、全世界のグローバリストに支配されていると思います」

水島「うん。ほんと、ですね」

モーガン「非常に失礼な話ですけども、私は自衛隊を尊敬していますよ。でも自衛官の一部は、平気で敵と協力している訳ですよ。非常に残念なことです。リチャード・アーミテージ（Richard Lee Armitage）という人が最近、亡くなったじゃないですか」

水島「そうですね」

モーガン「日経アジアの英語版を見れば、4月16日付の記事ですけれども Tough Coach and Friend と日本人が書きます」

原口「ええっ！」

モーガン「Friend と書きました。Japan Handler の中の Japan Handler が、リチャード・アーミテージで、あのケヴィン・メアさんも Japan Handler の中の Japan Handler です。日本人が積極的にあの連中と関わっている訳ですよ。ハndl されたい訳ですね。そういう人々は、全世界を見ても歴史を見ても、非常に稀な現象だと思います」

水島「そうですね」

モーガン「この構造が全て嘘ですよ。全てプロパガンダですよ。例えばウクライナ戦争、ニューヨーク・タイムズが先月末、実はワシントンがこの戦争をドイツの基地からずうっとつかさどって来ていると。日本のマスメディアを見ても、未だに日本は、ウクライナが民主主義の為に戦っているとか。ルビオ国務長官が代理戦争ですよ。はっきりと明言しています。本当のことを言えば、ワシントンがその戦争で負けました。このアンドリー・グレンコさんの本を最近、読んでいますけど、この人はね、こういう風に書きます。

『仮に N A T O が脅威だったとしても、それは独立国家への侵略と領土強奪の根拠に全くならない。脅威になる事、実際に侵略戦争を起こすことは、次元の違う話だと。脅威だと言うなら、その脅威に対して自分達の軍事力を強化すればいい。戦争を起こす根拠にはならない』って。

だから N A T O が入って来る前、それを先だって事前に自分の国を守る為にプーチンが動いたんですけれども、今になってもグレンコとか、あのウクライナに関する嘘を推している正論とかジャパン・フォワードとか、だって、この前に社長とお話をさせて戴いたんですけれども、このグレンコ、日本国民にあの3兆円ですか。3兆円、超えるんですか」

水島「うん」

モーガン「自分の財産が尽きる迄、日本国民に払い戻せばいいじゃないですか」

水島「うん」

モーガン「ウクライナは受ける一方ですか。真面なウクライナ人は居ますか。もう金くれよ、金くれ、払い戻すつもりは無いんですか。グレンコとか、あとジャパン・フォワードとか正論とかは、嘘をついたので責任をとってね。アメリカは、もし中国との戦争になれば負けるんですよ、負けます」

水島「うん」

モーガン「今月、H A L O というプログラムが取り下げられたっていう報道がありました。ヘイロー (H A L O) は Hypersonic Air-Launched Offensive Anti-Surface Missile って極超音速巡航ミサイルですよ」

水島「うん」

モーガン「米軍が発表しました。もう、その開発は止めました。今、中国がああ分野では

ダントツ的に一番、強いと言われています。矢野閣下は、もっとお詳しいと思いますが。2024年3月、下院の軍隊委員会ではジャック・マコーミック (Jack McCormic) っていうインテル分析家が China now has a world Leading Hypersonic Personal、極超音速核兵器、そのミサイルは中国の兵器省が世界一ですと。

今月、National Security Journal っていう雑誌があります。China might be able to hit US military bases in Guam with missiles swarms、その様なミサイルを使ってグアムの基地まで届くと。そのグアムの基地は何があるかって言うと、原子力潜水艦、ロサンゼルス級の。もし中国との戦争になれば米は負けるんですけども、誰が死ぬかって言うと日本人が死ぬ訳です。自衛隊の人々が死ぬ訳です。この日本、統合作戦司令部があるじゃないですか。もう完全に、この国が支配されています。占領されています。

じゃあ、何をすればいいかと。もう一つの問題ですけども、米の国債ですね。債権を発行しているんですけども、その利子だけで、米がそれを支払えるかどうか一苦労だと言われています。これは噂に過ぎないんですけども、連邦準備制度、FED (Federal Reserve System-FRS) は銀行が米国の発行する債券を強いて払わせるという噂があります。それはルーズベルト政権以来のことだと言われています。

要は、米があのか関税で中国と真剣勝負したいと思いますが、米が生き残るかどうか大きな課題だと思います。あんなに国債を抱いていて、じゃあ何をすればいいか。今月16日、アジア・タイムズっていうメディアに私が投稿した拙稿が発表されました。その中で5つのポイントを取り挙げて、日本は何をすべきかと。まず一つ目は、北朝鮮と会います」

水島「うん」

モーガン「会うことです。拉致問題の解決になるかもしれません。今の拝米保守が拉致被害者を完全にアメリカに売り出している訳ですよ。もう完全に、拉致被害者とそのご家族が拝米保守に裏切られている訳です。

2番目はロシアと話し合うことです。例えばクリミアとかドンバスとか、そういう所が、ロシアの所なんだよと認めて、その代わりに北方領土問題の解決にもなるかもしれない。その取引は不可能ではないです。

3番。米軍基地を少しずつ入り込んで、少しずつ自分のものにする。少しずつ慎重に、で、攻撃する訳ではないんですけども、もう一步、一步、入って、少しずつリースという形とかで米軍基地を日本のものにする。米軍基地に入っている人とか物に対して、スパイ活動すればいいと思いますよ。これ、日本ですから、自分の国ですから、スパイにはなっていないし、それ、敵です。

4番。米が発行している債券とかそれを日本が持っている訳ですけども、それを少しずつ売り出すとか、非常に慎重にやらなければならない。それは非常に罣ですね。でも、それが日本からすれば非常に大きなリスク。

5番目は真実和解委員会が必要だと思います。リベリアとか南アフリカとかネパールとか、昔、嫌なことがありました。日本の場合は、誰が米と協力しましたか。誰が日本国民の富と命を米に売り渡したか。それをはっきりする真実和解委員会をしなければならないと思います。あと裁判が必要です。先程、色んな話が合ったんですけども、あのものとか

で、研究所から出たウィルスとかのせいで、日本人が殺されていますよ。犯罪です」

水島「うん」

モーガン「ファウチは恩赦されたんですけども、日本の法律は関係が無いです」

水島「うん」

モーガン「ファウチが日本に来れば、逮捕すべきです」

水島「うん」

モーガン「殺人疑いで逮捕すべきです。あと、教育ですね。もう一つ出来ること、教育。それは学校に任せるんじゃなくて、各自の家庭で本当の歴史、本当のことを教えればいい。核保有は当たり前のことです。あと米栽培とか、私も日本が欠けている米を巡る関税とか当たり前のことで、あの米が完全に狙っていると思います」

水島「はい」

モーガン「日本の米市場ですね」

水島「そうですね」

モーガン「それは絶対に守らなければならないと思います。それは日本の魂です」

水島「うん」

モーガン「あと、最後ですけども、日本のアイデンティティ、ああ、もう一つ、米の敵を支援すればいいじゃないですか。フーシはヒーローだと思います」

水島「うん」

モーガン「あのフーシ」

水島「うん」

モーガン「あのフーシはジェノサイドをやめさせようとしている訳ですね。日本がこっそりでも支援すればいいです。最後、アイデンティティですね。いつも違和感を覚えるんですが、日本のアイデンティティの話になると保守は何かとか、何故かエドモンド・バークから始まる。日本と関係ないじゃないですか」

一同「(苦笑)」

モーガン「日本のアイデンティティは、話はいいかもしれないけど、そのバークとかフランスとかイギリスは関係無いんです。もっと深い、もっともっと、もっと深いアイデンティティがあって、それを取り戻せば色んなチャンスがあると考えています」

水島「なるほど」

モーガン「以上です」

水島「はい。今、丁度、アメリカの国債の話が出ましたけど、中国が今、売り出して揺さぶりかけているってことですけども、何処まで影響があるか判りませんが、モーガ

ンさんが今、言って戴いた話も含めて、川口さん」

川口「はい」

水島「お待たせしました。宜しくお願いします」

川口「宜しくお願いします。せっかく呼んで戴いたんですけれど、今、お話を伺っていたら、何か私の言いたい事を皆さんが言って下さったみたいで…」

水島「いやいや、すみませんね。最後になると、大体、そうなるんですよ。はい（笑）」

川口「今日、このテーマが『真の日本の独立は？』っていうことだったので、私は昔、日本にずっと住んでいた子供の頃から、成長してから日本っていうのは独立国だと思っていたし、それを疑うことも知らずに来た訳ですけども、でも、そのあとになって日本に米軍が駐屯しているのは、これは独立国ではないんじゃないかっていうような意見を聞いたり、段々勉強していく内に、ああ、やっぱり、これはおかしいのかなっていう風に思い始めて、今では、この状態っていうのは、日本もドイツも似ているなあという風に思ったんですよ」

水島「うん」

川口「それで当時は米軍が駐屯しているのが当たり前のように思っていましたけど、やっぱり当たり前じゃないと。今、ドイツにも、やっぱり5万人近い、4万人ぐらいかな、今、アメリカ兵が居るんですよ」

水島「うん」

川口「それで基地も、私はもっと少なくなっているかと思ったんですけど、やっぱりね、大きな所は二つですけども、あと小さな施設みたいな、米軍が居るような施設なんかは全部、合せると20か所近くあるんですね」

水島「ああ、なるほどねえ」

川口「ただ、これは冷戦のあった時代ですよ。1990年迄の数字を見ると、西ドイツの所に20万人のアメリカ兵が駐屯していたんですよ」

水島「なるほど」

川口「それで東ドイツっていうのは、面積とか人口にしたら西ドイツより三分の一ぐらいしか居ない所だったんですけど、だけど40万人のロシア兵が居た訳ですよ」

水島「うん、うん」

川口「凄い数が居たと。それでも、私は今日、このテーマを戴いたので周りに居るドイツ人に唐突にドイツって独立国だと思うかって聞いたら、みんな、凄く変なことを言い出してみたいな顔をしたんですけど…」

水島「なるほど」

川口「だから、やっぱり普通のドイツ人は、ドイツは独立国だっていう風に思っていて、まあ、そう思って当然ですけど、だけれど未だに外国の軍隊が駐屯しているっていうところでは、やはり日本と同じだなという風に感じています」

水島「うん」

川口「それから、今、ドイツって、これも最近、本当に似ているところばかり目に付いてしまうんですけど、日本と同じで、政治家とかメディアがアメリカのことを勿論、プーチンの事は、もう本当に悪魔のように言いますけれど、トランプ大統領のことも非常に、どうしようもない。ほんとクレイジーになって、どなたか、さっき、おっしゃいましたけど、そういう風に見ていて、何か本当に災いのもとみたいな、未だにそういう悪口ばかりですね。

それでトランプ大統領のしている今の状態、関税のこともそうですけれど、その状態を、このドイツの本当の独立っていうかEUの本当の独立、いや、アメリカからの依存を断ち切るきっかけにしよう、みたいな意見が突然、出て来たんですね。ここは、ちょっと日本と違うんですけど」

水島「うん」

川口「それでアメリカを、まあ、どっちかと言うとトランプ大統領のアメリカを敵視して、それに、そこから独立しようみたいな、そういう機運があって、そうなってくると、まあ、色々あるんですけど、特に今、ドイツで戦争の危機を煽る報道が物凄く多いんですね。段々、もう直ぐ、まあアメリカが攻め込んで来るとは勿論、言いませんけれど、アメリカはNATOから引き揚げてしまうかもしれないということを言って、そうしたら自分達は、自分達ヨーロッパの力で、プーチンの脅威を防がなきゃいけないから、だから、ちゃんと軍備費を上げて武装していかなくちゃいけないっていうようなことを凄く極端に言い始めたんですね」

水島「うん」

川口「ドイツってヨーロッパの中でも、一番、戦争反対の国で、ずっと来ていましたから今迄、そんな、いつでも戦争を美化するようなことは勿論、言えないし、あの先の戦争の時でも、その前の戦争の時でも、とにかく、どの戦争でも勇敢に戦った人というのを英雄のように教えたりすることは、もう一切なくて、戦争というのは悪い事で、悲惨なことがある、まあ、ここも凄く日本と似ているんですけど、そういう教育ばかり80年間やって来た訳だから、もう徴兵制があったのは東西の冷戦の時は仕方なく、アメリカの意向もあって徴兵制で兵隊が居ましたけれど、メルケル首相が2011年に唐突に徴兵制をやめてしまって、当時、停止っていうことにしたんですね。停止っていうことは、廃止じゃないから、いざという時には、また復活出来ますよっていう意味で停止にしたんですけど、停止というのを今、また復活させようという動きが物凄く出て来たんですね」

水島「う～ん」

川口「それで徴兵制復活について、去年の5月のアンケートでは、賛成っていう人達が、61%も居た。6割の人が、徴兵制っていうのは復活してもいいんじゃないかと」

水島「うん」

川口「そういう近辺で戦争も起こっているし、やっぱり徴兵制っていうのは必要ではないかと言った人が6割で、反対が4割弱だったんですね」

水島「うん」

川口「ただ年齢別で見ると賛成している人は、やっぱり年配の50歳以上の人が多くて、16歳から29歳っていう、本当に戦争になったとしたら、真っ先に戦わなきゃいけない人っていうのは、もう徴兵制なんかいいですっていう感じで3割ぐらいしか、徴兵制には賛成していなかったんですね。戦争に行くまでもなくて、まず徴兵に取られるのはその人達ですから、そんなことはご免だと思っていたから3割しか居なかった。

ところが今年の3月になって、もう一回、同じアンケートをとったら、もうねえ、賛成が1割増えて7割になって、それはいいんですけど、何と16歳から29歳の人の半分以上、54%ですから、半分以上が徴兵制賛成に変わっていたんですよ」

水島「ほお」

川口「だから、やっぱり、何処かで、そういう教育っていう程、まだ、そんな組織だったものではないかもしれないけれど、そういう空気が醸成されていて、何となく広まって来ているのかなあっていう風に思うんですね」

水島「なるほどねえ」

川口「ただ、これが、だからって言って、みんなが戦争に本当に行かなきゃいけないっていう風に思っているとは思えないんですけど」

水島「うん」

川口「だけど、かなり、その戦争っていう恐怖を煽るような、そういう政治家の発言だとか、それからメディアの報道は、この前も、もし戦争が今、始まったら我々の大きな病院では負傷者をちゃんと治療する事が出来ないって言って、何かある大きな大学病院が予算を要求したっていうことがニュースになっていて、そうしたら、その病院の手術室を、カーテンの隙間から手術をしているところを撮影させて貰ったらしくて、そういうのを見ると凄く怖い感じがするんですね。あっ、どうなっちゃうんだろうと思って、沢山、けが人が入ったみたいなの、まあ、全然、未だしなくてもいいような心配をさせる報道だったので、それも私はビックリしたんですね」

水島「なるほどねえ」

川口「ですから、こういう動きっていうのは、そのあと、どっちの方向に進んでいくのか判らないんですけど、もうEUの欧州委員のフォン・デア・ライエンって委員長ですけど…」

水島「委員長ですね」

川口「ドイツ人の女性ですよ。昔、ドイツの国防大臣をやっていて、でも、本当に評判の悪い人で、国防大臣をやっていた時も、その前の労働大臣の時も、その前の家庭大臣の時も全然、碌な事していなくて、それでも今、EUの一番の権力の座についている人ですけど、彼女はEUで軍事費を出さなきゃいけないので、3月の始めに8千億ユーロの投資の資金確保をしましょうっていう風に提案したんですね」

水島「なるほど」

川口「これは恐らく何処が財源なのかも判らないんですけど、恐らくEUの共同債権みたいなようなものが創設されて、そして欧州の再軍備にどんどん投資して下さいみたいな、

そういう風になるんじゃないかなと思うんですけど、でも、まあ、EUって今、全然、一枚岩じゃないですから、オランダ議会は直ぐにこの投資話には参加しませんって言っていましたし、恐らくギリシャだとかハンガリーだとかも、この話には、乗って来ないと思うんですけど、でも、そういう感じがあるっていうことを、ひしひしと感じてます」

水島「なるほど。国防意識が変わって来たっていうんですけど、仮想敵国っていうのは、やっぱりロシアですか」

川口「はい」

水島「ロシアが攻めて来るっていう感じですか」

川口「そうです」

水島「ああ」

川口「もうねえ、この間もね、これは国内の政治の話ですけど」

水島「うん」

川口「議会で、あることを決めなきゃいけないのに、この間、総選挙が終わったばかりですから新しい議会でやればいいんだけど、その新しい議会だと憲法の改正の話だったので、三分の二の賛成が必要なんだけど、新しい議会は、もうドイツの為の選択肢なんかが強いから三分の二の票は取れないっていうことが解っていたから、選挙が終わったのに新しい議会を招集しないまま古い議会で三分の二をかき集めて、それで憲法の改正を通しちゃったんですね。それで軍事費を無制限に増やせるということを通したんですけど」

水島「ああ。なるほどね」

川口「そういうことをやっていますね」

水島「はい。これは参考になるっていうか、逆の見方をすると、かくも簡単にマスメディアとかプロパガンダすれば、あっと言う間にドイツの大衆というのは徴兵制オクケーって変わってしまうという現実ですよ。日本もそういう可能性もあるっていう感じもしてきちゃうっていうね。これだけ動き易いっていうことですね」

川口「内務大臣に、かなり左翼の人が居るんですけど、その人がチラッと書いていたけれど、学校とか幼稚園のあたりから国防について教育したらどうか、みたいなことを匂わせる様な発言もありました」

水島「なるほどね。まあ、そういうようなことですね。ドイツと日本っていうのは似ているって言いますけどね、どういう形で今迄、世界を支配して来た人々は考えていたかっていうことも見えて来るっていう感じもします。それと米軍の基地の問題ですけども、今、この番組を観ている方は、よく解っていると思いますけど、日本には、もう海兵隊が殆ど居ないから実戦部隊は居ないっていうこと、韓国にも居ないということも一応、皆さん、踏まえておいて下さい。

戦略は、矢野さんにも用田さんにも色々お話を載っていますけど、もう前方展開の話は、もう無いという、アメリカ本土の方に、みんな、ハワイに引き揚げちゃっている。もうグアムにもサイパンにも居ないというね。こういう戦略をアメリカが今、執っているって

うことで、いざとなっても直ぐに助けには来れないということを、皆さん…」

川口「あのう…」

水島「はい。どうぞ、はい」

川口「ドイツに居る米軍のことですけど、これは今では、もうね、ドイツだとかヨーロッパをロシアの脅威から守る為に居るっていうNATOの元々の方針ではなくて、米軍は、ドイツにヨーロッパに駐屯している米軍っていうのは、例えばアフリカだとか中東だとかで、もし何か有事があった時に、アメリカから兵隊がばあ〜っと来る訳ですよ。

その時に、そのアメリカ兵の支援をする為に、まあ、色んな物資だとか、そういう支援をして、コントロールっていうんですか指令を出す為に居るのだっていう風に、もう言っていますね」

水島「そうですね。じゃあ、同じ状態ですね。我々は、この間、嘉手納基地を取材に行ってきましたけど、機材は全部、揃っている。嘉手納の地下ですね。あそこは絶対に公開しないんですけれども、核兵器もあったんじゃないかとか言われている。そういう場所には全部、揃っているけども、もし中共軍が急襲して、そこを押さえたら膨大な武器や兵器は全部、押さえられるみたいなことを沖縄のある人が話していましたけど。

そういう意味では、ドイツと日本の状態が同じということ、それから、やっぱり自分達が独立国家であるというような意識を持っているっていうね、まあ、幻想ですけども、そういう意味では似ているところもあると思うんですけども。取り敢えず、もう一つ言うと、これは原口さんに説明して貰った方がいいか分からないけど、日米安保の同盟ということでアメリカ軍は日本の何処でも兵隊を送るとか基地を造ることも出来るというね、こういう約束があるという、あの安倍さんの北方領土問題は、その辺で、そこへ来たら、歯舞、色丹に米軍基地を置くぞって言われて、ロシアが承知する訳が無いっていうね。必ず日露の間をアメリカは潰して来たっていうことを含めて、これも踏まえておいて戴きたい問題だと思います。

独立の道ということで本当に構造的に、さっきモーガンさんに挙げて貰いましたが、それを一つ一つクリアにしていかなきゃいけない。それと、やっぱり基地の問題っていうのを、敢えて、実は、一か月前ぐらいから私は自分の番組で、基地ということをもう一回、言った方がいいと。少なくとも80年、昭和で100年ですけど、戦後80年だったら、せめて戦後100年迄の間にね、あと20年の間に少なくとも米軍の基地が、我々の国でなくなるような方向というものを考えるべきじゃないかということを、敢えて言っておいた方がいいと思って、基地の問題は、やっぱり、昔、沖縄の左翼の人達が米軍基地撤去っていう形でやっていたけれども、そういう反米だけではなくて、自分達の独立というものを含めてやっていかないといけない。それから首都圏の問題は、横田基地の防空識別圏という、上の管理権っていうんですか」

矢野「航空管制権、航空管制権です」

水島「うん、そうですね」

原口「ラプコン、ラプコン」

水島「我々の国の首都でさえ、上空は全くアメリカ軍の支配下であるというね、こういう

ことも本当に知らない人が多いというね、これも…はい、どうぞ」

モーガン「そう考えると、先程、私が言わせて戴いたメアは、沖縄県民に対して『強請の名人』とかみたいな発言をしたと言われてはいますけど、米軍が強請じゃないですか。強請、たかりは米軍です」

水島「うん」

モーガン「ずうっと80年間、強請たかり活動をやってきたのは米軍です」

水島「うん」

モーガン「沖縄県民のせいじゃないんですし、ずうっとこの国の財産とか命を犠牲にしてきたのが、あのワシントンです」

水島「うん」

モーガン「アメリカも同様ですよ」

水島「うん」

モーガン「正直なところ、あの米軍は1865年の4月以降、米軍が一度もアメリカを守ったことが無いですよ」

水島「うん、うん」

モーガン「ずうっと必要の無い帝国の為の戦争ばかりやっていて、あの軍が我々を守ってくれているっていう偉そうな態度を執るんですけれども、逆ですよ。あの軍があるからこそ、我々は非常に危険に晒されています。日本も同じですね。この日本が米軍に守られているという妄想は、先程、社長がおっしゃったように、戦争が勃発した場合は、まあ、まずグアム迄ですね。それで多分、ハワイじゃないですか。結局、言ってみれば、カリフォルニアかもしれないけど、それがアチソンライン。日本が米軍を守っている訳ですね」

水島「うん」

モーガン「まず米軍が逃げている間、自衛隊が戦っている訳ですよ。日本人が死んでいる訳です。あの米は馬鹿じゃないですよ」

水島「うん」

モーガン「死なせることが上手です」

水島「うん」

モーガン「他の人に死んで貰って、自分が安全な所まで引き下がる。それが作戦じゃないですか。逆ですよ。この日本が米軍を守っている訳ですよ」

水島「うん」

モーガン「人質問題です、はい」

水島「また陸海空の統合利用というのも、米軍との指揮の問題から言うと、今度、米軍が指揮する訳ですから、そういう意味では、実質上、自衛隊が米軍の指揮下に完全に入って

いるっていうね。これは建前だけじゃなくて、本当にそうやって来ているっていうことも、やっぱり、我々は事実として踏まえなきゃいけない。

だからエマニュエル総督、私は総督と言い始めましたけど、そういう意味ではね、本当に露骨に我々の国が戦後の岸田さん、菅さん、今の石破さんを含めて、こういった意味では、そういう支配下にあるっていうことですけど。

それと、もう一つ、これは私の部分で言わせて貰うと、最近、言っているのは、実は、我々が戦争の悪の枢軸国になっているんじゃないかと」

原口「うん」

水島「つまりヨーロッパのグローバリスト、それから我々の国、そして中共、こういったある種のグローバリズムが、さっき施さんがおっしゃっていた自由貿易がいいとかね。こういったように、実は戦争をしたがっている、戦争を起こして来た勢力の中に、実は、我々が入っているっていうことを自覚していない怖さがあるんじゃないかという気がしてしましてね。気がしているというより、そう判断してしまして、悪の枢軸から早く離れた方がいいというね、まあ、トランプと共闘するにはどうするかっていうことを、つまり、これは反グローバリズムの政策を、我々の国が執ることと、日本を主語とした道を歩むっていうことを、やっぱり選んでいかなきゃいけない。

これは物凄く大変ですけど、あと20年で何とか戦後100年で実現できればという気がしていますけども、難しいことは難しいっていうのは解っています。はい、ちょっと少し早めですが一回、お休みして、後半は、じゃあ、どうするのかっていうことをやっていきたいと思います。では、一回、お休みします」

一同「(礼)」

## <後半>

水島「後半になりました。後半は、この独立の道を、皆さんに話し合って貰いたいと思います。前半も色々な提案を戴きましたけども、優先順位とか色々あると思うんですけども、全部、やらなきゃいけないことばかりで優先順を言えないんですけれども、まず我々がやれること、やることということを考えたいと思います。どうですか。これは矢野さんからお願いします」

矢野「私は防衛安全保障が専門ですので、まずは原潜の建造ですね」

水島「なるほどね。はい」

矢野「ええ。核の問題というのは元々公に大っぴらに言ってやるもんじゃないので。原潜を持つということは、やはり、それ自体、いつでも核保有が出来る訳ですから」

水島「繋がりますよね」

矢野「もう既に韓国が着手していますけども、日本もそれをやるべきだと」

水島「はい」

矢野「それと同時に極超音速ミサイルですね。やはり、これも開発しなきゃならないし、それだけの能力は充分、ありますから」

水島「うん」

矢野「これは、もう決断するかどうかだけです」

水島「本当にねえ、そういう選択と集中をね、さっき出た核武装っていうのは難しいかも分からないけど、原口さんが極超音速ミサイルのことをお話されましたよね。隕石と同じぐらいのスピードだったらって、まあ、この間、それが出ましたよね」

矢野「ええ、あのう…」

水島「しかも…」

矢野「地下まで破壊、出来ますよね」

水島「あのう、音速二十…」

原口「オレシュニクですね」

矢野「はい。そうです」

水島「これ、ロシアが開封しちゃっている訳だから、日本もそれをやれば核武装しなくても、それなりの力を持つ抑止力にね」

矢野「いや、核は必要ですよ」

水島「ね。いや、まあ、そういうのもあるということだね。それはまあ…」

矢野「だけど、そこまで来ているということですね」

水島「そういうことですね」

矢野「新核戦力でも、そこまで来ていると」

水島「私もねえ、前に海上の矢野さんがね、原潜4隻、2兆円。8兆円だったら16隻の原潜が、まあ、今、始めたら5年で出来るという話でね。別に核兵器を積んでいなくても、いつでもカチャンと装備できるようにすれば、今、おっしゃったように、抑止力にはなりますよね」

矢野「それと情報に関連して言うと、まずはスパイ防止法ですね」

水島「そうですね」

矢野「これが無いとセキュリティを確保できないので」

水島「そうですねえ」

矢野「もう戦略機関を創ったり、それから情報機関を創ったりしても、みんな、浸透され

ますから」

水島「そうですね」

矢野「頭脳が正常に作動しないんですよ（失笑）、だから免疫の無い人体の様なものです」

水島「そうです」

矢野「外部の色々な有害なものがどんどん入って来ますからね、拒否できない」

水島「これは前も安倍さんの時代にNSCつくると言ってやっていたけど、物凄く薄っぺらなものでしたね。尖閣に関する内部文書を一回、皆さんにね、NSCの課長会議ですか。この文書を公開したことがありましたけど、何だか、えっ、これがNSCなのかいというね（失笑）」

矢野「まあ、支える情報機関が無いから、そうなっちゃうんですね」

水島「ということです」

矢野「ええ」

水島「それを、また取り締まる、その中に入って来る奴も、どうやってチェックできるのかな。この政治家の中にも、本当に明らかに中国系の人とかがいる感じを、よく解る人も沢山、居るしねえ。そのチェック機関って言うか諜報機関が必要だということですけど、どうやって、ちゃんと作るかですね」

矢野「あとはメディア改革を何とかしないとイケないと、私は思います」

水島「はい、そうですね」

矢野「これだけ情勢が変わっているし、日本国民自体の一般的レベルは非常に高いと思いますね」

水島「そうですね」

矢野「ところが意識が変わらないというのは、間に立っているメディアとか、情報を提供している側が左翼に席卷されているので、皆、詰まっていますからね」

水島「はい、そうですね」

矢野「大学もそうですし」

水島「はい」

矢野「教育機関もそうです。だから、ここを何とかしないと駄目ですねえ」

水島「おっしゃる通りですね。そこに、もう一つ、スマホもメディアに入れておいた方がいいと思いますね」

矢野「ああ、勿論、はい」

水島「これは前に知ったことですが、本当にロシアの今の現在の地下鉄の乗客のみなさんが読書しているんですよ」

富岡「うん」

水島「ところが日本の電車を見たら、みんな、スマホやっているって」

富岡「そうですね」

水島「正直言うと、この差は凄いなと思いますけどね。富岡さんはどうですか」

富岡「いや、私は30年以上、大学に勤務していますけど、やっぱり教育の問題は根本的に非常に重要で、さっきジェイソン・モーガンさんから日本の指導者とか、インテリゲンチャーと言うか、道徳観と言うか魂が駄目だと言われて、その通りだと思わざるを得ないところが非常に忸怩たるところがあるんですね。

私は、やっぱり一つは歴史教育、これは、つくる会とか自分も関わっていますけど、もう一つは、やはり宗教教育ですね。昭和20年12月のGHQの神道指令は、非常に重大な戦後日本を決定付けていて、ですから国家神道の解体ということが、天皇の在り方の解体ということが目的だったんですが、政教分離っていうのは、信教の自由を保障するための手段であって、それ自体は目的ではない訳ですよ。

でも、そういう意味で、戦後の日本は正に宗教教育っていうのが一切、為されて来ない。つまり魂の教育ですね。これは一切、等閑（なごり）にされてきたっていうことが非常に大きくて、ですから今、学生なんかに言うんですけど、とにかく何も知らないです」

水島「うん」

富岡「それで世界を動かしている、例えばユダヤ教であるとかキリスト教とかイスラム教は一神教ですよ。こういうものは何の知識もない。今、起こっている問題の背景には、謂わば、全てそういう一神教の問題っていうのが全部、背後にあって、そこから見ると、どんどん解けていくんだと」

水島「うん」

富岡「そういう知識は、残念ながら、我々が教えて来なかったし、そういう知識を十分に持っていない。それから、これは結構な日本の知識人も非常に欠けている」

水島「うん」

富岡「戦後の知識人はね。戦前っていうか明治以降っていうのは、やはり、そういう意味ではイスラムの需要もありましたし、色んな意味で宗教心っていうか、そういう問題を、しっかりやっていたと思いますね」

水島「うん」

富岡「だから、やはり、これは非常に大きな問題だし、さっき、矢野閣下がおっしゃった国学というね、これも戦後は全くないがしろにされてしまった訳で、ようやく、ある時期から、評論家と言うと小林秀雄さんとかが本居宣長とかね、そういうのをやりましたけれども、やっぱり、まだまだ日本の学問というか、日本の思想の源泉は何処にあるのかっていう問題を探っていかなきゃいけない」

水島「うん」

富岡「モーガンさんがさっき日本の保守がね、アイデンティティはエドモンド・バーグから来ているって言ったけれど、それは、おかしいと。全くおっしゃる通りですよ。結局、日本人の本当のアイデンティティって一体、何かっていうね、これは、やっぱり保守思想の本質が問われている訳で、その場合、どういう風に、それを日本の歴史と宗教から、探っていくかっていう問題は非常に重要だと思っています」

水島「そうですね」

富岡「うん。やっぱり戦前までは日本の哲学者も宗教家も、みんな、そういうことをやっていた訳ですよ。西洋の価値観だけではないものですね。欧米列強で日本は近代化する為に西洋化して正に不平等条約をね、関税自主権を取り戻した訳けども、一方で、日本人の魂というか、日本人の思想とは何かというのを、私は昭和の大体10年代に特に深まっていたと思うんですね。そういう人達が出て来てね。

ですから、それが、あの戦争敗戦で全部、消えてしまったということですから、やはり、もう一度、そういうものを再発見するっていうことは非常に重要で、ですから教育という問題も、そういうものを踏まえた日本思想の探求っていうのかな、これが必要だと思うんですよ。

やっぱり宗教教育をやっていないから、逆に言うとオウム真理教みたいな、とんでもないことが、結構な大学の教養ある人々がああいう風な形になってしまうということが現に起きているっていうところもあると思うんです」

水島「丁度、この討論でよく出る宗教問題を議論した時、ああ、明治維新のことですね」

富岡「はい、はい」

水島「つまり朱子学と、もう一つは仏教ですね」

富岡「はい」

水島「これが皇室の祭祀の中にもちゃんと入っていた。つまり聖徳太子の時代の仏教伝来から、ずう〜っと天皇自体が敬虔な仏教徒だった訳です」

富岡「うん」

水島「それと江戸時代に関しては、武士道が支える様な形の朱子学って、つまり、これは中国から来たものですけども、我々から見ると、実は世界宗教というものを全部含めて、神道だけじゃなくて物凄くバランスの取れた、それこそ調整というかね、皇室が持っている存在自体、もっと幅広かった」

富岡「うん」

水島「ところが、やっぱり西洋文化を入れる為に、結局、神道だけにした。国学派と言うか平田派と言うか、こういったものが極端な形でイデオロギーに変わっていったと」

富岡「うん、そうですね」

水島「つまり幅広い哲学や、そういう自然観や世界観だった皇室もそうですけれど、これが突然、イデオロギーに変わってく。まあ、皇室の問題がイデオロギー化して皇国史観みたいな形に変えられていくことによって、やっぱり我々の国自体の、まあ、戦後っていう

こともあるけど、戦前の明治維新から、もう一回、我々、見直さないとか…」

富岡「そうですね。そうですね」

水島「西欧の文明っていうのは、どうやって入れたのかっていうことも含めて考えないといけない」

富岡「うん」

水島「そこまで行かないと中々戻らないっていうかね」

富岡「戻らないですね」

水島「その辺、本当に…」

富岡「だから正に明治以降の近代化ということの問題だと思いますね」

水島「そうです。おっしゃる通りですね」

富岡「う〜ん」

水島「これは、また、いつも言うことで、モーガンさんと話している事で、番組でも話したことですけれども、少なくともドストエフスキーの『大審問官』、あまり読んでいない方が多いと思うので、カラマーゾフの、まあ、ザックリ言って、…

富岡「尋問のね」

水島「大審問官と、審問官というか、あれは悪魔とイエスの話ですよ」

富岡「うん」

水島「魂の解放かパンを食わせるのか、どっちなんだって」

富岡「うん」

水島「それで悪魔が言う訳ですよ。お前は本当に魂だけで解放なんかできないと思っているだろうと」

富岡「うん」

水島「人々はパンを先に望むんだよと。お前は、それを解っていながら魂の解放ばかりをいうんじゃないよと。俺は、そういう辛さが、そういう人間の本当の姿はパンを求めている姿を知っているから一生懸命、やっているんだと」

富岡「うん。イエスにね」

水島「とイエスに言うんですよ」

富岡「言うんですよ、再臨したイエスにね」

水島「イエスは、ハッキリと説得されちゃうかなあと思うと…」

富岡「まあ、黙っていますね（笑）」

水島「イエスが立ち上がって、はい、って言って接吻しちゃうんですね」

富岡「大審問官に」

水島「これがキリスト教の宗教と政治の中の折り合いのやり方っていうのが凄いね…」

富岡「そうですね。だから宗教と政治の非常にダイナミックな弁証法があってね」

水島「そういうことですよ」

富岡「プーチンはね、ちゃんと読んでいるんですよ（微笑）」

水島「ええ」

富岡「哲学的教養があるんです」

水島「そう。だから、政治と宗教っていうものを、どれだけ真剣に自分の命とか、国民の政治っていうものを意識しているかっていうね、石破さんを見ると、本当に勘弁してくれよっていう感じになるのは、そういうところだね」

富岡「うんうん」

水島「そういうところが日本人に今、凄く欠けている。小林秀雄が言っていた様に、何か負けちゃったら直ぐ反省してね、あれが悪かった、これが悪かったって言っているけど、小林秀雄が、私は馬鹿だから反省なんかしないって、誠に爽快な、戦後に対して、戦後の知識人に言ったっていうのは非常に共感するんですね」

富岡「だからアメリカにしても、やっぱり、まあ、特に、前にモーガンさんと宗教問題で対談させて戴いた時に、やっぱり東部っていうか、要するに17世紀のニューイングランドから来たピューリタンであって、それはそれで一つのキリスト教の形だけど、彼らは新しい大陸、地上に王国を創ろうっていう、ある意味、ちょっと倒錯した…」

水島「うん」

富岡「人間の力で全て出来るんだっていうね、そういうことで、やっぱり…」

水島「そこは凄く近代的だよな」

富岡「そうなんです。非常に近代的ですよ。だから、やはりアメリカの持っているキリスト教の問題性ってあって、だから南部のフォークナーとかのお話をしたんだけど、アメリカっていうのは、そういう意味では、全部、ワシントンとか、あっちが東部に、我々はいっているけど、やっぱり、そこを持っている。実はアメリカン・キリスト教自体が非常に問題があるんだっていうね」

水島「うんうん」

富岡「だから、そこは、やっぱり考えなきゃいけないし、そこは非常に大きなテーマだと思うし、逆に言うとソビエト国家っていうのも、あれは地上に共産主義の樂園を創ろうっていうプロレタリアのメシヤニズムですよ」

水島「うん」

富岡「だから、ある意味、冷戦ってアメリカとソビエトの対の国を創ろうっていう、このふたつの争いだったんですよね。ハラリっていうイスラエルの神学者がホモデウスと言っているけど、正に人神の物凄く傲慢な西洋人って言ったらいいのかなあ。傲慢な考え方ですよね。日本はそうじゃない。本来、その伝統を持っているはずだからね」

水島「そうですね」

富岡「う～ん。だから、そういう意味でも、やっぱり戦後のアメリカ一辺倒っていうものから、まあ、勿論、アメリカは文化の中で面白いものもあるんだろうけど、やっぱり日本の教育文化っていうものの、本当の復活が無いと、独立心っていうのは出来て来ないんだと思うんですよね」

水島「本当はディスカバージャパンっていうのが必要になってね」

富岡「うん、本当にそう思いますね」

水島「今、全く忘れ去っているからね」

富岡「うん。だから、所謂、保守派もね、やっぱり、そういう議論をしていかなきゃいけないし…」

水島「そうですねえ」

富岡「それは非常に大事なことで」

水島「さっきのことで言うとね、上祐さんというオウム真理教の元幹部の人にも出て貰ったことがあるんだけど…」

富岡「ああ、はい」

水島「私は少し仏教をかじっているというのもあるけど、オウム真理教の原始仏教の理論は、実は結構、緻密な訳ですよ」

富岡「うん」

水島「誠に優れている。つまりポアするっていったことだけが、いったことだけって言う誤解されちゃうけど」

富岡「うん」

水島「別に、私はオウム真理教じゃないんだけど、オウムはね、そっちの方へ行く行動の方が、所謂、外国勢力とか色んなものに利用されてという気がするので、若い人達が原始仏教のお釈迦様の言ったことだけを認めるっていう形でやったら、受け入れ易いというね」

富岡「うん」

水島「結構、怖い、怖いというかね、あのう…」

富岡「そうですね」

水島「政治と宗教、彰晃、彰晃って言っているああいう状態ならいいんだけど、本当に

そういうところも含めて危ないなあという、さっき、川口さんがね、徴兵制があつと言う間に、この２年でドイツの若者の意識がすぐ変わってしまうっていうのはいいことって言う人も居るかも分かんないけど、結構、ヤバいなっていうねえ、気もするんですけどね。どうですか、原口さん、まあ、他のことでも」

原口「おっしゃる通りだと思いますね。ドイツが、もうゲマインシャフトが無くなって、ゲゼルシャフト化している、それを、さっき川口先生がおっしゃって下さったんじゃないでしょうかね。元々ドイツっていうのは、非常に人と人との結びつきが深くて、そして非常に内政的な国家で、日本で言うと、水島社長がおっしゃるように、やはり明治維新以降の傀儡政治を止めなきゃ駄目だと思うんですね。

我が国は国津神の国なので『やわらぎをもって尊しとなす』と。ここを前も今の上皇陛下がおっしゃった『殯（もがり）が重い、火葬にしてくれ』もう一つは、生前の、まあ、何て言うんでしょうね、ちょっと言葉をあれしますけども、この３つをおっしゃった時に、やっぱり明治以降の垂直型の天津神の時代が日本の本当の時代じゃないんだとおっしゃったように、僕らは解釈したんですよ。

それで国津神、八百万の神に、それぞれ宿って、だから日本が変わる時って民から変わる訳ですよ。上から変わるんじゃないんですよ。だから富岡先生がおっしゃるように、歴史を学び、そして、やっぱり『和を以て貴しとなす』という、この大和心に帰る時に、アメリカのトランプ革命は正に、建国の精神であり独立の精神に戻っていく訳ですね。

それからプーチン革命っていうのは、ギリシャ正教を中心にする訳ですね。今回、オールオフィスでの各国の首脳との会談を見ていて、一番、トランプさんがニコニコしていたのが、やっぱり先生がおっしゃるようにメローニさんですよ。あのメローニの有名なポポロ広場演説っていうのは、私はジョルジャ、女、母、イタリア人、キリスト教徒、そして、それは私から、これを奪うことは誰も出来ない」と

水島「うん、うん」

原口「正にアイデンティティですね。我が日本はきっちり守って来た。ところが、まあ、私の先祖が明治維新に関わっているから非常にあれだけど、佐賀の役とか西南戦争は征韓論でやったんじゃないんですよ。日本を正に、よそに売り飛ばすようなことをやって…」

水島「うん、そうでした」

原口「結局、傀儡に負けて行って、そして左派の革新官僚が政治をぐちゃぐちゃにする訳ですね。その結果が２２６だったり５１５だったりする訳だけど、私は、人間の存在を超えたものに対する、敬虔な日本そのもののアイデンティティに戻ると。これが一番だと思います。だから大和心ですね。僕は実践者なので、２８９の小選挙区に『日本独立！』、日本再興。弱体化装置を入れられているんですよ。モーガン先生がおっしゃる通りです。

もう本当に幾重にも入れられている。僕は尖閣に３回、飛んだんですけど、中国船が去年は３６５日の内、３５５日も来ているんですよ。尖閣諸島開拓記念の１３０周年の時に、政府から誰一人として来ていない」

水島「うん」

原口「何処へ行っているんだろうと思ったら、中国に行って、自公の幹事長が握手してい

る訳ですよ。それ、やってられないですよ。だから本当に日本を守るっていうことからすると、このアイデンティティ、自己同一性の学び。さっき、施先生がおっしゃったように、関税自主権だって忘れてる訳ですよ。先達が、どんなに苦労して、関税自主権を勝ち取ったか」

富岡「日清、日露でね」

原口「ええ」

富岡「ようやく、そのあとですからね」

原口「そうですよ。うん。それを何か自由貿易体制に反するトランプを悪人だと、強盗だとかカツアゲだとか言っている訳ですよ。冗談言って貰っちゃ困るでしょう。それと、やはり、あの敗戦の時と同じようなことを今、また、コソコソ隠れてやっていますよ。これは矢野先生に伺いたいんですけども、この間もここで申し上げました黒海、黒い海で軍事演習に…」

水島「海上自衛隊がね」

原口「ええ、海上自衛隊を派遣していて、それを嘘っていうか騙していた訳ですよ」

水島「うん」

原口「僕の親戚は自衛隊が多いんですが、ふざけんなど、命令されたら行くよと。それは行かざるを得ない。だけど、それって何になるのと。NATOの高みに登るとか言っているけど、NATOが守ってくれますか」

水島「全く、その通りだね」

原口「トランプ政権は、むしろ逆にNATOのディープステイトから離れようとしていますよ」

水島「うん」

原口「それを手伝えばいいのに、逆に、逆噴射しているでしょ。それから昨日でしたかWHOも、また、あの例のパンデミック条約みたいな、もう惨憺たるものを纏めて、これはアメリカの中心がバイデン政権だったんですよ」

水島「はい」

原口「でもバイデン政権が居なくなったから少し安心していたら、中心が居たんですね。ここに居たんですよ。日本です」

水島「そうなんですよ」

原口「ディープステイトってアメリカの専売特許じゃないんですよ」

水島「うん」

原口「尻尾が頭になることもあるので、完璧に今、尻尾が頭化していて、掛谷先生がおっしゃるような、今回、ホワイトハウスから、あれが出ましたね」

水島「うん」

原口「あのラボリーク。ラボリークを見ていたら、もう当たり前のことが書いてある訳ですよ。当たり前のことが書いてあるのに、それを言っている人は陰謀論者」

水島「うん」

原口「僕なんか自分が癌。去年は髪の毛が無かったですからね」

水島「ねえ、それが原因だったっていうねえ」

原口「ええ」

水島「はい」

原口「それなのに被害者がいくら言っただって、無視される」

水島「うん」

原口「知っていて無視しているんですよ」

水島「うん」

原口「だって、この間、選挙の神様って言われる藤川さんが亡くなったんですけど、藤川さんは僕の選挙の時に来て言っていましたもん。ちょっと、これはYouTube だから言えないけど、厚労省の上の人が、あれは絶対に打ちちゃいけないって言って。知っていて態とやるって、それ、罪ですよ。罪ですよ。だから逮捕すべきだし、訴追すべきだと思いますよ。でも今、逆ですよ。僕がお菓子屋さんに訴追されている訳ですよ（苦笑）」

一同「（苦笑）」

原口「と言うか提訴されている訳ですけどね。まあ、それ、どうでもいいけども」

水島「いや、でも随分、皆さん、頑張ったお陰でね」

原口「ええ」

水島「厚労省が変わって来たって言いましたね」

原口「ええ。変わってきました。もう7千8百52億の豚積みの基金、どうも、これを無くすみたいです」

水島「ああ」

原口「それから、驚きますよ。工場を造るのが得意な経産省だから、私の所も一枚、噛ませろって。3千億の基金を乗せて、令和13年迄、あれをつくり続ける訳です」

水島「ねえ」

原口「信じられないでしょ。もうお金をドブに捨てて、だから最後に国防で言うと、やっぱり日本の物を日本人が造らないと駄目です」

水島「うん、そうだね」

原口「Foreign Military Sales を今、岸田首相の時に 1 兆 4 千億円して、今度も、また、更に増やすと。朝、誉也君に聞くんですよ」

水島「ああ」

原口「誉也君、県会議員の時、自民党の青年局長仲間で一緒だったから、僕の会報にこう書いてあるんですよ。自民党はいかんと。よらしむべし、知らしむべからずであると」

水島「うん」

原口「ちゃんと情報公開しなきゃいけないと、彼は言っているんですよ」

水島「そうだね（笑）」

原口「今回の自衛隊の日報を出せって言ったんです」

水島「うん」

原口「無いって言うんですよ」

矢野「いや、無い事はないです（苦笑）」

原口「無いことないでしょ」

一同「（苦笑）」

原口「無い事、ないですよね」

水島「何でもいいから書かなきゃいけないんだから（苦笑）」

原口「書かなきゃいかんでしょう（苦笑）」

矢野「法律で決まっています」

原口「そうでしょ、法律で決まっている。無いって言っているんですよ。これが、やっぱり、戦前の、ここに書いてあるのは日支戦争で 4 年間、戦ってヘロヘロだったのに、更に戦線を拡大して負ける戦争を負けたって書いてあるんですよ。だから、今、また同じことをやっているの、まあ、でも大分、変わってきました。民から変わってきました」

水島「うん」

原口「今度も 29 日、財務省解体デモに私も出ますし」

水島「うん」

原口「各地で、やっぱり民から変わるんだなあっていうのを、新自由主義とか、さっき矢野先生がおっしゃった、金融資本主義じゃなくて公益資本主義にしていこうと。温かいマネーにしていこうと。それは地方から結構、動いて来ているんですね。お金と物と情報を循環させようっていう、やっぱり日本は地方から変わっていくんだなあって。アメリカがジェイソン先生のような、南部の心ある人達から変わって来ている様にですね」

水島「まあ、本当に、それはねえ、草莽崛起というかね」

原口「そうですね」

水島「こういう、流れがあるのと、もう一つは、さっき、ちょっと言ってくれたことは、あのう、江戸時代のね、私は最近、それ、ずっと、まあ、研究というか、やっているのは、江戸時代の農民も商人も職人も全部、武士道が基準になっている」

原口「基準です」

水島「つまり武士だけが武士道をやっていたんじゃないっていうね、だから日本人の意識は、その道義性が高いとかね、一番、解り易く言うと、鬼平犯科帳っていうのが人気あるらしいんだけど、１００万人都市の江戸に同心が３００人ぐらいしか居なかったっていうのは、物凄く治安が良かったってことですよ。勿論、火付け、盗賊とか、沢山、居たでしょうけども、３００人プラス岡っ引きだけですから、１００万都市で、そんな数百人で治安が守られていたっていうのは、火事が多かったんですけど、これは、もう、しょうがないっていうねえ。

そういう意味では、日本の都市が非常に清潔であり、且つ又、それで、いつも言いますけど世界で一番、子供が可愛がられていたというね、自分達では分からないけれども、外国人から見るとそうだという。客観的に知らないことを教えてくれるっていうことが、渡辺京二さんの『逝きし世の面影』っていう本に書いてあります。

だから、今の時代と、やっぱり、さっきおっしゃったように意識が違いますね、庶民も何も。だから、そこを思い出すか、再生できるかっていうのが大事だと思います。掛谷さん」

掛谷「はい」

水島「どうですか」

掛谷「富岡先生の宗教とか文化、教育の話ですが、私は科学のサイドに居るんですが、その話をしたくて…、さっき言ったように私は新型コロナ起源を追いかけて来て、実は、世界の研究者と、ずっと毎月４時間、議論していたので、その中で日本人は私一人でした」

水島「うん」

掛谷「西洋人が多くて、その中のコミュニケーションで、何か西洋と日本の違いみたいなことを、かなり感じた話をしたいなと思っています」

水島「はい」

掛谷「それで、ちょっと前に松本誠一郎先生がこの番組に出演されて、あの方は、本当に凄い教養人ですね」

水島「うん」

掛谷「あの方が私の本を読んで戴いて、私の言っている事は丸山眞男の延長だと」

水島「う～ん、なるほど」

掛谷「こういうことをおっしゃって、さっき小林秀雄の話が出てきましたけど、保守側で、こちらはリベラルと一般的に言われる側ですよねえ」

水島「いや、でも彼は凄い奴ですよ」

掛谷「まあ、そう。私は、これを読んで、いや、これって70年前ぐらいのものですけど、でも全然、古びていないですよ」

水島「はい」

掛谷「これでどう何を感じたかと言うと、要するに、私がよく言っているのは、今でも、日本の蛸壺型っていう言い方と対抗してささら型っていう言葉が、今、あまり使わなくなっていますけど、要するに日本の科学っていうのは、その西洋で色んな分野に科学とか技術が分かれてから明治維新でやってきたと。ただ元々サイエンス、科学っていうのは神学から来ている訳ですよ」

水島「はい」

掛谷「要するに、神がこの世の中、世界をどうつくったかっていうので一生懸命、星を観察して、惑星はグネグネっているけど、神様が何か意図してつくったんだから、もっと、ちゃんとした法則があるんだと思って、それこそ聖職者のコペルニクスが、太陽が中心で、他が回っていると思ったら非常に綺麗な形になると。

それからニュートンが、この人もキリスト教を信じていた訳ですけど、これは出量に比例して距離の二乗に反比例するということ、その軌道は説明できると。万有引力の法則ですね」

水島「うんうん」

掛谷「だから、所謂、科学の法則って、みんな、神はこの世の中、どうやって創ったんだろうというようなことを知る為に、だから、それで色んなクーロン力だって9の二乗に反比例するとか、非常に美しい式で書けると信じていたから、ああいう法則をどんどんと見つけて行った訳ですよ。最初はそこですね。

だから、よく博士を増やせって言いますが、博士って Doctor of Philosophy ですよ。哲学博士。私がコロナの起源を追いかけている時に、実は、今日、未だ早くいらっしゃった方には私の専門のあの三次元ディスプレイ装置をお見せして、他の方には、あとでお見せしますけど」

水島「なるほど」

掛谷「実は、明日からパシフィコ横浜で展示もやるので、そういうことが専門で、今迄、やっていたのに、いきなりコロナの起源の塩基配列の解析を始めたら、お前の専門と違うじゃないかって日本でよく言われるんですよ。いや、Doctor of Philosophy である以上、今、この研究をやっている他の研究も勉強して準備すれば論文を書けるぞ。私もコロナ起源、コロナ関係の論文は4本も査読を通しています。だから、どんな分野でも、論文を書けるのは Doctor of Philosophy のはずですよ」

水島「うんうん」

掛谷「実際、私はパリグループっていうグループに参加していました。世界の研究者が集まった時にビゼンダンガってドイツの人が100ページぐらいのコロナ起源の論文を出しているんですけど、彼は物性です。物理学者です。物性の物理学者が、いきなりコロナの起源の100ページの論文を書くんですよ」

水島「うん」

掛谷「それは世界では当たり前ですよ」

水島「うん、うん」

掛谷「結局、要するに日本って、科学がそういう具合に明治になって大分、細分化されてからの科学しか知らない状態で導入されてしまったので、所謂、それぞれの学者はそれぞれの分野の職人なんですよ」

水島「うんうん、うん」

掛谷「だから教養全体を見るっていう、それが無いのが、やっぱり国際社会の色々な動向の時も、非常に細分の中で勉強をしているので、全体が見えないっていうようなところで、やっぱり、今、日本って本当に高校から文系、理系、分かれるじゃないですか、アメリカは Under Graduate 4 年は一般教養を学んでから、Law School へ行ったり、Medical School へ行く訳ですよ」

やはり教養教育を分厚くしないと、このままでは拙いんじゃないかなということで、まず、とにかく教育改革で一つ、それが必要なあとと思います。あと、もう一つ宗教の話で言った時に、私は今回、トランプ政権の中で一番、注目しているのはNIHですね、国立衛生研究所」

水島「はい」

掛谷「ここは色々なアメリカの大学とか研究機関に研究費を出すのと、あと自前でも研究を持って、とにかく保健関係の巨大な組織です。そこの所長になったのが、ジェイ・バタチャリアっていう人です。この前も、ちょっと紹介したんですけどね。この方が、そこの所長に4月1日になって、そのあとの最初のインタビューで、これが感動したんですけど、彼はインド系です。元々インドで生まれて、アメリカで18歳の時に洗礼を受けたらしいんですね。その時に彼はずうっとスタンフォードの先生で、所謂、ファウチとか先程、言いましたけど、そのメインストリームのコロナ対策に反対していたんです。ずうっと、当時の内地の所長のコリンズとかに異端の疫学者とかって呼ばれて、かなり家にも色々な脅迫とかもあったらしいんですね。メインストリームと違うので。

その時に、じゃあ、コリンズと話したんですかって言ったら、去年の8月に直接、会って話したと。そうしたらコリンズが、そのことについて謝ってきたと。コリンズも実はクリスチャンらしいんですけど、実は、私は別にコリンズに対して怒っていなかったと。彼の為に祈っていたと」

水島「うん」

掛谷「要するに、ずっと彼がその本当のことに気づくようにと祈っていたと。謝罪して、それで、結局、そうするとキリスト教って何かって言うと、祈る、謝る、許すという、このセットなんだなあと。

それって今で言うと、ある種のPDCAサイクルじゃないですか。間違ったら反省して、次へ行ける。私は、この新型コロナウイルスの起源だと結局、私が正しかったということですね。起源の話。今迄、一般の人の何人かから謝罪の言葉を戴きましたが、専門家の

方からは誰一人、未だ謝罪の言葉を戴いていません」

水島「ああ、そう」

掛谷「要するに日本って、まあ、文化で忘れるのを待つ。水に流す（笑）」

水島「（笑）」

掛谷「というのは良い面もあるんです。或いは、職人の文化として、物に魂が宿るっていうのは、そういう良い面は物凄く沢山あるんですけど、やっぱり、日本で元々あった日本で謝るっていうのは、切腹する、美しく死ぬ訳ですね。その精神を責任者が失ってしまったんですよ」

水島「うん」

掛谷「だから、私は、やっぱり今、現代に切腹とかは辞めるってことかもしれませんけど、まあ、そこで、辞めることしか責任とれないやり方っていうのは、どうかなあっていうのはあるので、そこだけは、やっぱり西洋流を取り入れないと、中々反省して次に生かせない。だから、今、ずうっと間違っただ人は、みんなが忘れるのを、ひっそり待っていますよね」

水島「それ、良くないですね」

掛谷「う～ん、これは、やっぱり拙いなあと思っていて、そこは私が、すいません、西洋流から学んでもいいところかなあという具合に思っています。はい」

水島「いやいや、本当に命に関わる問題でしたからね」

掛谷「はい。そうです」

水島「それは、やっぱり科学的に間違っていたら、間違っただけ言うべきだしね」

掛谷「はい。因みにバタチャリア、ファウチの本社にも賛成だと言っていらっしゃるんですよ。要するに彼も許すことによって、次の反省が出来るという、そこは、甘過ぎるという気も少しあるんですが（笑）」

一同「（笑）」

掛谷「ただバタチャリア、ファウチやコリンズからムチャクチャ叩かれたんですよ」

水島「ああ」

掛谷「それでも、そう言えるっていう精神性に、私は感動しました。はい」

水島「なるほどねえ」

掛谷「私は許せない、未だ人間として未熟なので許せないかなあ、ですけど（笑）」

水島「いやいや、いや」

原口「許せたんでしょう」

掛谷「勿論、責任をとった上で、責任をとったら許すっていうことかもしれませんね。や

っぱりファウチのしたことは、あまりにも罪が重いので、相応の責任をちゃんととって戴いた上で、例えば無期懲役になって、その刑を全うしたら許すっていう、多分、そういうことですかね、はい」

原口「僕ねえ、掛谷先生がおっしゃる、その教育、今、ザイム真理教と戦っているじゃないですか。ザイム真理教の洗脳にかかり易い人間ってパターンがあるんですよ。僕らと同じ何とか大学を出ていて、そして誰かが教えてくれたのを上手に再現できる人間。これが一番、情報が非対称ですよ」

掛谷「はい、はい」

一同「ああ」

水島「ああ、なるほど」

原口「どう考えても。ザイム真理教の方が情報を遥かに持っている。だけど、こっちは自分が頭いいと思っている訳です。そうすると最初に洗脳されたやつをその通り言うんですよ」

一同「ふう～ん…」

掛谷「それは科学者も全く一緒ですよ。だから科学者も非対称戦ですから、とにかく科学者って、それこそ逆に一番、難しいんです。だから一般人は、いくらでも騙せると思うので。日本を律するのって、やっぱり基本的に神の目じゃなくて世間の目ですよ。なので、そういう意味で言うと一般人っていうのは、凄く世間の目を気にして規律正しくやるんですけど、世間の目を完全に騙せる科学者が、やっぱり日本の科学者は世界で最も魂が汚れていると思っています（笑）」

一同「（笑）」

水島「なるほどね」

原口「でも政治家は世間の目を気にするでしょ」

掛谷「はい、そうそう、そう」

原口「だけどザイム真理教の目しか気にしない奴が多いんですよ」

一同「（笑）」

水島「いや、まあ、そうだよねえ」

原口「だから駆逐しなきゃいけない」

掛谷「だけど科学者は選挙で落ちる可能性が無いから。やっぱり、日本の科学者が一番、魂が汚れていますよ（笑）」

原口「確かに（笑）」

掛谷「これ、理解して戴いて良かったです（笑）」

水島「ザイム真理教的な人達にとってトランプが解り難いのは、やっぱり、これね、馬淵

さんと話したんだけど、１ミリずれたら死んでたでしょ」

掛谷「はいはい、はい」

水島「これはキリスト信者っていうかトランプもキリスト教徒ですから、この人にとっては、どんな思いがするか想像してみた方がいいと。ちょっとずれたら、もう死んでいた訳ですよ。消えていた訳。ところが、これがずれたっていうのは、彼にとっては奇跡だし、神の恩寵っていう風に受け取るのは、普通、我々だって別にキリスト教徒じゃないけど、これが耳じゃなかったら、おお～、俺は本当は死んでいたっていうね。このことを、ザイム真理教的な人達は、つまり理論とか何かを超えたもの、奇跡みたいなものが、実際は人間の中に起こり得るっていうねえ、これは想像力ですよな。

だから、そのトランプがやっている訳だから、ザイム真理教的な意識で、プラグマティックな感じで政治をやっていないんだっていうことぐらいは、我々が想像してもいいというね」

原口「だから、おっしゃる通りで人間の存在を超えたものを感じている人は、掛谷先生がおっしゃるように、やっぱり横に繋がるんですよ」

掛谷「(頷く)」

水島「そういうことですね」

原口「ザイム真理教とは、やっぱり絶対に繋がれない」

水島「それは、よく解る」

原口「もう常に自分がどう得かっていうのを考えている訳ですね」

水島「そうだよな。はい」

原口「掛谷先生、すみません、名前を読み間違えてしまって」

掛谷「いやいや」

水島「そういう話です。じゃあ、施さん、どうぞ、お願いします」

施「あ、そうですね。はい。今迄の先生方のお話を聞いて、私も自分の番が回って来るまでに色々なことを考えていたんですけども、先生方の話を聞いていると、何かまた色々と話したいことが色々出て来まして(笑)」

一同「(笑)」

施「例えば、最初に原口先生がおっしゃったように、日本は民から変わる、地方から変わると、私も正にその通りだと思うんですね。また日本は、そのザイム真理教的な頭でっかちに学んだ者っていうのは大体、正に汚れているというかですねえ(笑)」

一同「(笑)」

施「何かそっちじゃないんですね。やっぱり何て言うかな、半ば無意識に受け継いで来た者っていうのが非常にしっかりしている国だと思うんですねえ。ですから先程、水島社長がおっしゃったように、日本は一番、清潔感とか規律正しさっていうのがあると。これ

も、政府からの命令とか何か法律で造られている訳では全然、無いんですね。やはり、これは半ば無意識にずっと受け継いで来た。それは言ってみれば、先程、おっしゃっていたように、世間の目を意識するっていうところから生まれて来る感覚かもしれないけども、その世間の目を意識する感覚って、世間の目を意識する他者の顔色を伺うっていうと、凄く悪い言い方で、最近、使われていますけれども、ただ、もっともっと深い意味があって、日本人は、やはり今生きている他者だけじゃなくて、その過去の人々の思い、死んだ人の視線っていうのを強く意識するってというのが、日本の本来の道德だったんですね」

水島「うん」

施「まあ、ご先祖が草葉の陰から観ているとか、又は柳田國男は、日本の死生観ってというのは、死んでも生まれ故郷を離れないと。故郷の山の高みから、我々を常に見とるんだってというのが、この日本を取り巻く国にはそういうのは無いけども、日本人はそういう風に思っていたと。だから日本の民衆の意識ってというのは、亡くなった人ってというのは、我々がずうっと見ているんだと、我々の近くから常にですね。

これってというのは、要するに現在、生きている人間の視線だけを気にするんじゃないくて、過去の死者のずうっと無数の蓄積ですね。それを意識した中で、今、私達は何をすべきなのかということを考える、これが本来の日本の道德だったんですね。

ですから死者の目を意識するっていうことは、将来を意識する事にも繋がるという訳ですね。この縦軸の中で我々が今、何をすべきなのかというのを一人一人が考えると。だから日本で一緒にお盆の期間は、伝統に先祖の目を非常に意識して食事をする…」

水島「うん。そうですね」

施「一緒に子供を連れて墓参りに行く、草葉の陰からお爺ちゃん、お婆ちゃんが見ているぞという。神社もそれですねえ。それを意識させるというのが伝統的な教育だったと。だから日本人の道德観、単に世間の目を意識するだけじゃなくて、そういう無数の死者の目を意識するっていうところが、私は日本の道德の根幹だと思うんですね。それが強いからこそ、頭でっかちじゃなくて、やっぱり半ば無意識に培われて来た、そういう感覚ですね。

これが培われて伝えられていくってというのは、やはり家庭と地域社会だと思うんですね。ですから家庭と地域社会っていうのが壊れてしまうと、日本の土台が揺らぐんだと思うんですね。今、地域社会は、もうボロボロだと思います」

水島「そうですね」

施「本当に、もうシャッター一街だらけですし、今、日本の小学校は1990年、30年前と比べて、小学校の数が大体2割以上、減っているんですね」

水島「そうですね」

施「小学校の校区が2割以上、減っているっていうことは、地域社会が消えていると言ってもいいと思うんですね。大体、小学校の校区ってというのが地域の最小単位だと思うんですよ」

水島「はい、そうですね」

施「これが子供会なり、色んな町内会の単位でもありますし、あとはお祭とか何かする時、伝統芸能を伝える時っていうのも大体、校区単位で色々やっているんですね。これは今、もう消えちゃっているっていうことは、もう本当に学校、小学校の統廃合みたいなことになっているっていうのは、もう地域社会がいかに消えているかということですね。

今度は、家庭も殆ど少子化で維持できなくなっているという形になってきていますよね。今、私が懸念しているのは、夫婦別姓ですね。夫婦別姓は今、今度の国会で選択的夫婦別姓が通るかもしれませんが、あれも今、割りと保守派の政治家とかは、夫婦別姓って言うと、国民に何故、別姓がいかんのかっていうのが、あまり浸透しないと。

だから、今、戦略を変えて、これ、いつも間違えちゃうんですけど、旧姓の通称使用の法制化ですか」

水島「うん」

施「旧姓の通称使用の法制化ですね。それを今、進めようとしていますよね。私は旧姓の通称使用の法制化、つまり旧姓を通称として、ちゃんと使えるようにビジネスの世界とかですね。これを進めましょうっていう戦略で、私は基本的に、これでいいんじゃないかと思うんですね。

それで、今度、夫婦別姓を導入しましょうっていうのは、家庭を壊したい。家族っていうのを最小単位に保ちたいとか、社会の単位っていうのは家族だっていうのをぶっ壊したいとか、戸籍制度をぶっ壊したいっていう話だと思うんですね。

だけど、今、元々左派が選択的夫婦別姓導入っていうのは、まだ解るんですけど、今、財界団体が物凄く頑張っていますよね」

水島「うん」

施「経団連にしる同友会にしる、夫婦別姓を一番、入れようとしている。これはビジネス界の女性、働く女性の為だって言いますが、ただ旧姓の通称使用の法制化っていうことで、働く女性の不便なんっていうのは、もう殆ど解決されると私は思うんですね。だけれども、それじゃ駄目だと」

水島「うん」

施「何故か財界団体は、今でも物凄く強く言っていると」

掛谷「中国の圧力ですか」

施「これは、いや、中国もそうですね。完全に夫婦別姓ですし」

掛谷「それは中国の制度に日本を寄せる為にやっていると思うんです」

施「ええ、ええ、ええ。何かそれもあるかなとも思いますし、もう一つは…」

水島「それと、今、おっしゃったように、それを法律にしなきゃいけないのかと」

施「はい」

水島「うちの女性のキャスターは結構、結婚している人が居ますけど」

施「ええ」

水島「全部、旧姓ですよ」

施「ええ」

水島「それでも何の問題も無いです。昔の結婚前の姓を名乗っていますけどもね」

施「ええ」

水島「だから全然、法律にしなきゃいけないね…」

施「ただ、全ての公文書とかパスポートとか、その公式の場合ですね。要するに、公式の文書で旧姓が使いたければ使えるように、ちゃんとビジネス界にしても、法律関係にしても、学会の特許にしても全部、旧姓で問題が無いようにしようと言っている訳ですね。

これは基本的に、それをやれば別姓の主張っていうのは完全に抑えられるんじゃないかなと、合理的な主張はですね。私はそう思うんですけども、だけど経団連とかはそれじゃ駄目だと言っていると。だから、やはり正に家族の解体、戸籍の解体みたいなことをやろうとしていると思うんですね」

水島「そっちへ行きたいんですよ」

施「これは多分、正にディープステイト的なものがあるのかなあみたいな感じがするんですけども」

水島「結局ね、哲学までとは言わないけれども、一番の本質は、やっぱり家ですよ」

施「はいはい」

水島「家っていうのは、時間を持っている」

施「ええええ。正にそう思いますね。はい」

水島「さっきおっしゃったように時間を無くして、今、生きているだけの人間関係だけの姓というのを、それだけの過去を、ずうっと背負った…」

施「ええ」

水島「例えばモーガンさんならモーガンという名前は、親、お爺ちゃん、お婆ちゃんとかね、ずうっと持っているものを、まあ、通称にしろ何にしろ使うのは構わないけど…」

施「いやいや、いや」

水島「法律にしちゃうっていうことは、それは今を生きているジェイソン・モーガンっていう人だけの現在になっちゃう」

施「ああ、いやいや、それは、あくまでも通称なので、あのう…」

水島「通称がね」

施「ええ」

水島「今言ったように芸名とか、そういうものは、今迄も別に何のトラブルもないのに、法律化させようっていうのは、その…」

施「いやいや、ちょっと、そこは誤解があると思います。要するに公式のパスポートとかで、旧姓でも不便が無いように制度を整えるべきだって言っているだけで、本当の名前っていうのは勿論、結婚したら同姓になるっていう形ですね。なので、私も、そのう…」

水島「芸能人でね、芸名を持ってね、例えば葛城奈海さんは芸名ですし、私は一緒に外国とかへ一緒に行ったことはないけど（苦笑）、彼女の持っているパスポートは本名ですよ。それで別に本名だからって問題は無いと思うし、だから芸名は芸名として私は結構、尊重される。パスポートとかそういうところにやるっていうこと自体、法律化するということがね、だからLGBTもそうですけど、法律化するっていうことが問題でね、私は、日本の場合は同性愛だろうと何だろうと、みんな、結構、凄く大らかですよ。

世界で一番、大らかなぐらい大らか。これを法律にするっていうこと自体、しっかり考えないと、今言った、例えば、遠野物語の家っていうのは、曲り家なんていうところは何かって言ったら、みんなが帰る場所です。お母さんの場所みたいな」

施「いやいや、いや、だから、それを守ろうとしてやっている訳だと、私は思うんですけども…」

水島「いや、高市さんの場合はね、通称をやるんだ、通称をやるんだって言ってね、そういうのを基本的に言っているけど、私はゴリゴリの保守かも分かんないけども、反対なんですよ」

施「うん」

水島「あまり手輕にやるんじゃねえよっていう感じがしてね」

施「だけど、それをやると世論調査とかで負けちゃうんですよね。なので戦略的に、私はそれは正しい戦略だと思っていますけれども、いや、まあ、それは一先ず置いておいたとして…」

水島「まあ、それは意見の違いだけでいいですけど、はい」

施「ええ。それで、私が言いたいのは、やはり日本人の倫理観って正に、今、水島社長がおっしゃったように、世代を通した縦軸の意識ですね」

水島「うん」

施「これが壊れてしまうと、やはり日本人の屋台骨というか精神というのは壊れてしまうと思う訳ですね。ですから家庭と地域社会っていうのは、やっぱり、どう守っていくかということだと思うんです」

水島「そうですね」

施「その為に、正に先程の関税とか、そういう経済というのを、家庭と地域社会を成り立たせる為に、もう一遍、立て直すべきではないかと」

水島「そうですね」

施「それを主軸にすべきではないかとか、何かそういう風に思うんですね。すみません、他にも言いたいことがあったんですけどド忘れしてしまって（笑）、また、あとで話したいと思います。はい」

水島「はい、是非、また」

施「はい。すみません」

水島「モーガンさん、お願いします」

モーガン「はい。有難うございます。私がさっき、かなり喋り過ぎて川口先生のお時間を奪ったっていう反省があったので…」

水島「いえいえ、いえ。川口さんには、じっくり喋って戴きますから」

モーガン「言っていていいですか」

一同「（笑）」

水島「先に話して貰いますか」

モーガン「はい、宜しければ」

水島「じゃあ、川口さん」

川口「はい」

水島「宜しくお願いします」

川口「ああ、恐れ入ります（微笑）」

水島「（笑）」

川口「私の話す時間を奪って下さっても全然、構わないんですけど（笑）」

一同「（微笑）」

川口「私は、これから何をしなきゃいけないかっていう話ですけど、最近、面白い意見を読みまして」

水島「はい」

川口「例えばトランプ大統領の今、やっている関税の問題ですけど、ドイツでも日本でも、それは、もう、とんでもないことだって言って、何か全然、これでは計画が立てられないから経済を壊すとかっていう風に言われているんですけど、チェコの元大統領だったバクラフ・クラウスっていう、かなり年配の人が居るんですけども、チェコで2003年から13年まで10年間、大統領をやっていた人ですね。その人がインタビューされていたんですけど、彼はトランプ大統領のやっている事っていうのは冷静な事であって、今、起きている事態に、ちゃんと冷静に反応しているだけで、新しい事をしようと思っている訳ではないっていう風に言ったんですね。

それで何故かと言うと、今、自由貿易がトランプのせいで壊されるとか、不自由になるとかっていう風な批判が多いけれど、そうじゃない。今、現状は自由貿易なんか既に無いん

だって言うんですね」

水島「うん」

川口「それで関税以外に色んな障害や、そういう関税外の障壁っていうのが沢山、あって、それをトランプっていうのは最終的には無くしたいと。それが目的でやっていることであるっていうことです」

水島「うん」

川口「それでね、それを偶然ですけど、私は前に自分でも調べたことがあって、例えば、自動車ですよ。今、最初にトランプ大統領が自動車に１０％の関税をかけるって言ったところから始まったんですけど、今迄、ＥＵは輸入車に対して、ずっと１０％かけていたんですよ」

水島「うん」

川口「それでアメリカは２．５％しかかけてなくて、それを１０％に上げると言って大騒ぎになって、この問題が始まったんですけど、ＥＵの方が沢山かけていた訳ですよ」

水島「うん」

川口「でも、誰もそのことを言わないんですよ」

水島「うん」

川口「それで他に高い関税とかの他に色んな、例えば官僚的なハードルっていうんですか、色んな規則をつけて、それで、なるべくＥＵに対してとかドイツに対して輸出し難くすると」

水島「うん」

川口「例えば、この間、１２月に、イーロン・マスクさんが言っていましたけれど、彼がテスラの工場をベルリンの近郊に建てて今、生産をしているんですけど、そちらを建てる時に、まず認可をする。認可の申請をして認可を得る為に、まず２万５千の書類を出さなきゃいけないと、それも全部にスタンプを押さなきゃいけなかったと言うんですよ。だから紙だったっていうことですよ」

水島「うん」

川口「だから、もう認可だけでそれだけかかったと。これは他のドイツ国内の産業にとっても凄いハードルになっていることで、物凄く多くの書類が必要であって、色んな規則があると」

水島「うん」

川口「あとは大分前、もう１５年ぐらい前ですけど、ＥＵとアメリカの間で自由貿易の契約を、協定を結びましょうというので、ずう～っと何年も何年も交渉していて、結局、今、止まったままで実現しなかったＴＴＩＰ（環大西洋貿易・投資パートナーシップ）というのがあるんですけど、その時も、私は覚えていますけれど、例えばアメリカからの鶏肉を輸入するのに、衛生の問題だとか、アメリカでは鶏のサルモネラ菌を防ぐ為に一回、

塩素で消毒してから売っているらしいんですけれど、それをEUでは禁止して、だからアメリカの鶏は入れられませんとか、大体、そういう細々したことが色々あって、そういうのがあるし、あと、今、新しいのは炭素で生産の時に、沢山、CO<sub>2</sub>を出しているような製品をEUに入れる場合は、そこの入り口の所で炭素なんとかとかっていうのを、まあ、関税とは言わないんですけれど、そういうのをかけますとか、色んなのがある訳ですよ

水島「うん」

川口「それというのは、トランプ側から見ると、アメリカに対して非常に酷い仕打ちを今迄、受けていたという感覚で言って来て、やっていることらしいんですよ」

水島「ああ、なるほどね」

川口「ですから、そういうもの、それをチェコのクラウス元大統領はそれを言っていました。それが非常に面白くて…」

水島「そうですね」

川口「そういう意見っていうのもあるんだなあっていうことを最近、感じました。ですから、イーロン・マスクは関税なんていうのは全部、やめた方がいいって言っていましたが、これはトランプ大統領の意志に反したことじゃなくて、トランプ大統領も最終的には、そこへ持って行きたいから二人で意見は合っているのかなという風に私は見えています」

水島「なるほどねえ」

川口「はい。それから、先程、掛谷先生がおっしゃっていた話とは違うんですけれど、失敗しても誰も謝らないとか間違ったことを言っても、全然、責任を取らないとかおっしゃっていて、あれで、なるほどと思ったんですけど、それは今、EUもそうですけどドイツで本当に、しょっちゅう起こっていて、例えば、ある政治家、これはキリスト教の社会同盟の方の政治家でしたけれど、その人が色々EUの中の他の車にドイツの道路を通る時にはお金をかけましようっていう風に、高速道路で料金を取りましようみたいなね」

水島「うん」

川口「そういうようなことを言って、その為に物凄くお金を使って用意して、そうしたらドイツってEUの中で敵がいっぱい居ますので、EUの裁判所で、それが認められなかったんですね」

水島「ええ」

川口「だから、その認められない内に、そこまでお金を使って用意しちゃったっていうのは物凄く責任重大で凄く追及されたんですけれど、だけど、その人も一切、謝らなかったし、そのまま政治家をずっと続けていましたし。それから昔、メルケル首相の時に一度、防衛大臣で、やっぱり、この人は何処の人だったかな、キリスト教民主同盟じゃないんですけど社会同盟だったかな。凄くスーパースターになっちゃった国防大臣が居て、メルケル首相はその当時2009～10年辺りでしたけれど、脅威を感じたんですね。次の選挙で、彼に首相の座を奪われるんじゃないかって、でも彼は突然、博士論文が盗作であった

っていうスキャンダルが、あっという間に出て…」

水島「ほお～、それは拙いね」

川口「その時は、もう1週間しない内に彼が更迭されて、辞めさせられて居なくなっちゃったんですけど、今、また大分経って10年以上、経っていますから、所々で出てきていますけども、全然、当時の様なスーパースターじゃなくて、何かちょっとボロくなっちゃって出てきていますけれど、そういうことがあって当時は、それでメルケル首相の鶴の一声でバンッと責任とって辞めさせるみたいなことをやったんですけど、そのあと、もうどんどん博士論文の盗作っていうの、いっぱい出て来ているんですよ。だけど誰一人、辞めないですね」

水島「凄いですね」

川口「これは謝るとか、責任を取るとかっていうのは、どんなに税金を使って、どんなに国民に迷惑かけて税金を無駄遣いしても全然、誰も責任を取らないというのが、今のドイツの状況です」

水島「だから、これは本当に掛谷さんが言っていたね、だからモーガンさんが今、まだ甘いついて言っていたけど（笑）」

一同「（笑）」

水島「いや、我々は、どっちかと言うと、本当に直ぐ水に流すとか謝ってくれりゃあいいのよっていうのとかね」

掛谷「ただ、私はドイツの話を今、初めて聞いたんですけど、私は、所謂、注射関係の話で、やっぱり間違っていたって言って、アメリカとかイギリスのお医者さんとか、科学者は謝っている人が結構、居るんですよ。アメリカだとドクター・ドゥルーというネット番組をやっている人とか、最初は進めていたんだけど、そのあと、実は、フェミニストの活動家でナオミ・ウルフ（Naomi Rebekah Wolf）っていう人が居て…」

モーガン「ああ、あの人は謝りましたね」

掛谷「うん、そう、そう。あれに対して謝りましたね。ナオミ・ウルフの方が正しかったと。その人は全然、医療の専門家じゃないんだけど、あのドゥルー・ピンスキー（Drew Pinsky）はナオミ・ウルフに対して謝っていましたよ」

モーガン「うん」

掛谷「うん。あとはイギリスでジョン・キャンベル（John Campbell）という看護学者の人も最初は推奨したんだけど、間違っていたって、最近は副反応の問題を、論文とかを取り上げていて、いや、イギリス、アメリカとかの医療関係者で謝っている人は結構、居ます。だから凄いなあと、日本の医療関係者は誰一人として謝っていないですよ」

水島「謝っていないね」

掛谷「うん。だから、私はドイツのことは分かりませんが、イギリス、アメリカは、結構、居ますよ。私は、ちょっと英語圏しか見ていないので」

水島「厚労省、どうするんだっていう気がしますよ」

原口「去年の５月に、僕が謝ったら、世界ニュースになりましたもんね」

水島「ああ～」

原口「あの日比谷の…」

モーガン「なりましたね」

水島「ああ、例のあれね」

原口「ねえ」

水島「はいはい、はい」

モーガン「ネットニュースにもなりました」

原口「ニュースにもなりましたもんね。だから、いかに謝らないか」

水島「あれは凄かったですね」

原口「黙あ～って火が消えるのを待っているっていうね」

水島「ね」

掛谷「感染症学会っていうのが、今年は５月８日から１０日。パシフィック横浜であって、私は去年も参加しましたが、また参加します。そこで厚労省の官僚に結構、上の方の人です。コロナの起源の話、どのぐらい把握しているか聞いたら、結構、解っていました。あの塩基配列を見たら、それは誰でもおかしいと思うでしょと言っていました」

水島「うん、そりゃそうですね」

掛谷「だから判っています。だから、日本のインテリジェンスはああ言ってますけど、厚労省の官僚は分かっていたね（笑）」

原口「そう。製薬会社も判っていたでしょ」

一同「ああ～あああ、ああ」

原口「もう２０１９年に準備していたっていう内部告発がありました」

掛谷「ああ、そうですか」

原口「うん」

掛谷「私は、そこを全然、事情は知らないのであれですけど、まあ、厚労省の官僚には直接聞きました。はい」

水島「あれ、原口さんを訴えてきた奴は未だやっているんですか、あいつら」

原口「未だやっていますが（失笑）、かなり困っておられるみたい」

水島「なるほど、トーンダウンしてきてるんだね」

原口「っていうか、やっぱり選挙妨害ですよ」

水島「そうだよねえ」

原口「郷原先生とかに言わせるとね」

水島「結局、結果としても、そうなりますよね」

原口「ええ」

水島「明治製菓ファルマか。我々は街宣であそこに行きましたけどね、あの当時は強気でしたよね」

原口「強気だったけど、僕が最初にしたのは731部隊だと言ったと。明治製菓ファルマは731部隊になれないんですよ。あれは国家がやったことだから」

水島「うん、うん」

原口「僕は、日本に対して731部隊っていう謂われのないことを言っているんだっていうのを警告しただけで、明治製菓ファルマのことは全く関係ないです」

水島「まあ…」

掛谷「ただ追及はファイザーとモデルナにすべきだと思います。やっぱり量が一番、沢山なのでね」

水島「そうだねえ」

掛谷「本当の敵は、そこですよ」

原口「ほんと、そう」

水島「そう、やっぱりねえ、所謂、超過死亡って言われるやつね」

掛谷「はい」

水島「あれも、この間、ゲストに出て貰って、グラフで全部、見ると、もう歴然としていますよね」

掛谷「だから超過死亡問題は、よく、こういう話をすると直ぐ論文を書けって言われますけど（失笑）、医師会と日本医学会が共同で出している英文誌で意見論文ですけど、まあ、これを調べなきゃいけないと。だから、今、データをちゃんと整理しないから、こういう問題が考えられるっていう意見も査読を通過して掲載されたので、大分、変わって来ていると思います」

水島「そうですね」

掛谷「はい」

水島「はい。まあ、これは相当、やっぱりトランプさんの革命というのは、ちょっと極端な言い方をすると、ニュートン物理学からアインシュタインの相対性理論っていうかね」

一同「うんうん、うん」

水島「私はそういう風に例えるんですけど、我々の日本文化っていうのは、実は、そこが

違う。ヨーロッパ近代が信用して来た理性とか、こういったものだけじゃなくて、実は、さっき施さんに色々おっしゃって戴いた、時間の中で生きているっていうね、つまり政治の中に時間性を持ち込んでいるっていうね、これはアレクサンドル・ドゥーギン

(Aleksandr Gel'evich Dugin) という人が言っている、何故、マスクはおかしいんだと。おかしいって言うか凄いんだと言うと、極端に短くしていると。

政治でやることは今迄、3年も4年もかかるものを、もう10日で50日でやろうとしているって。そういう政治にある時間っていうものを極端にしていると。だから火星へ行くというのも、我々は今、こいつは、とんでもないことを言い出すんだって言うけど、彼にとっては時間の感覚がそうだから、あの感覚は今、そこにあるのと同じになるっていうね。

だから、ここを見ないと、トランプの政治とかイーロン・マスクの在り方が、ちょっとね、という言い方が時々解り難くなるのかも分からないけど、ちょっと、そこら辺のね、我々日本の文化の本質っていうのが時間というのをねえ…」

富岡「だからテクノリバタリアンっていうのは正におっしゃる通り…」

水島「そうですね」

富岡「あれですよ、基本はね」

水島「そうですね」

富岡「うん」

原口「時間軸と安全保障ですよ」

水島「そうなんですねえ」

原口「あの米中の貿易の中身を見ると、US Imports from China が殆どエレクトロニクス、それからコンピュータとか機械を、中国からアメリカが輸入して輸出は農産品ですよ。ということは、製造無くして技術無し。製造無くして安全保障無しだから、トランプさんの方から、アメリカから見たら凄く合理的ですよ」

水島「そうだねえ」

原口「国内に製造業を戻すと。そうしないと安全保障も無い訳だから」

富岡「そうですねえ」

水島「いや、だから本当にねえ、これは、またドゥーギンの指摘ですけど、中国が駄目だって言っているけど、つまりエネルギーも食糧も自立できない。だけど、ロシアとくっついちゃったら、どうなんだと」

一同「うん。」

富岡「そうだと思います（失笑）」

水島「圧倒的なね。だから、前に色々言ったように、ロシアとあれは戦略核も何も、この二つがくっついたら中国は、とても敵わないって言うけど、実際、ドゥーギンはプーチンは強かだから、中国とロシアのくっつき、アメリカとロシアのくっつきっていう二択を選

ぶことが出来る。でも我々の国は何も考えていないっていうね（笑）、そこら辺のところが  
あるんですけど。モーガンさん、お待たせしました」

モーガン「はい、すいません。先程、ウィルスの話とかあのものの話が出たんですけれど  
も、最近、亡くなったローマ教皇が、かなり、あのものを推し推し、していて、日本国内  
のカトリック教会があのような陰謀を、かなり推していましたので、あのカトリック教会  
が反省できるかどうかは、一つの大きな課題ですね。出来ないでしょうけど」

水島「難しいでしょうね」

モーガン「あいつらは、もうキリスト教と全く関係がなくて、国際的に児童性虐待組織に  
なっていて…」

一同「（苦笑）」

モーガン「あの人々は、もうマフィアよりも酷い訳ですし、あのカトリック教会は酷い訳  
ですが、もう日本国内の道德観を取り戻せばいいと思います。さっき夫婦別姓の話が出て  
いましたが、やはり必要なのは自民党から国民を守る党が必要だと思っています」

一同「（笑）」

モーガン「それは何のものかって言うと、夫婦別姓は、やっぱり男性をターゲットにして  
いるフェミニズムですね」

水島「う〜ん」

モーガン「この50年間、ずっと男性を無くそうとしていて、で、悪いんですけれども、  
It's Men's World. 私達はリーダーですよ。それで家庭のことを担当して下さるのが、  
女性さんですけれども、男性は自分の身、命を懸けて、その家庭を守ることが義務です  
ね」

水島「はい」

モーガン「それが我々の役割ですし、それは何処の国でもそうですが、フェミニズムは、  
どれだけ男性をターゲットにしてきたか、夫婦別姓もそうですけど、あとは大学ですね、  
アメリカの大学は盗作論文を作る工場になっています」

一同「（苦笑）」

モーガン「みんな、盗作論文ですね。政治家も大学の教授も、ハーバードの学長も盗作論  
文をやっていましたね。日本の大学は盗作論文が問題かどうか分からないんですが、フェ  
ミニズムとLGBTがどれだけ侵食しているかと、今、DOGE（Department of  
Government Efficiencyー米政府効率化省）をマスクがやっているんですけど、そのような  
組織が必要だと思います。色んな所にスポットライトを当てて、その内部はどうなってい  
るのかと。政府も、政府の内部とか大学の内部とか、あとは日本の真の独立を達成すれ  
ば、何をすればいいのか、達成する為に何をすればいいかと。靖国神社まで行って、英霊  
に感謝すべきだと思います」

水島「はい」

モーガン「英霊はアジアを解放しました」

水島「うん」

モーガン「その人々の持っていた魂とか、その大義を取り戻せばいいと思います。それから皇室。皇室を守らなければならない」

水島「うん」

モーガン「旧式休日ですか。あの緑の日とか、あのような変な休日をやめて、天皇陛下を中心にする休日に戻せばいいじゃないですか。建国記念日とか、そのような休日をやればいいと思います。あと、焚書ですね。焚書を読みたいと思います」

水島「うん」

モーガン「今、焚書をもう一度、復旧しようというプロジェクトに取り掛かっているんですけども、その焚書を読めば、昔の焚書は凄かったなあと思うんですよ」

水島「ああ、その通りですね」

モーガン「はっきり物事を解っていたんですよ」

水島「はい」

モーガン「米の本質とか色んなものを解っていましたし、道徳観をしっかりと持っていたんですよ」

水島「うん」

モーガン「それは、一人二人だけじゃなくて、みんな、そうやっていたんですよ」

水島「うん」

モーガン「これは私が言うことかと、自分でもビックリしているんですけども、労働組合の出番だと思います。私も、ずうっと労働組合を怪しく思っていたんですよ。アメリカの労働組合は、共産党に近いとかマフィアに近いとか色んな暗い反面があるんですけども、でも労働組合が、もうちょっと頑張ってくれば、日本の会社は、もっと給料を払ってくれるかもしれないしね」

水島「うん」

モーガン「会社が必ず仲間だと思っていない。それから日本は、B R I C Sに入ればいいと思います」

水島「うん…」

モーガン「日本は一刻も早くB R I C Sですね。あとはスパイ防止法が必要です。ウクライナという国、あの国こそが強請タカリの国なんですよ。ウクライナっていう強請タカリ。あいつらにツケの請求書を送ればいいじゃないですか」

水島「うん」

モーガン「払ったお金を返してくれと」

水島「うん」

モーガン「お金くれ、お金くれっていうスーツを着ない奴ら」

一同「(失笑)」

モーガン「日本にも来て、お金くれ、お金くれ。このようなグレンコという、みんなが、ウクライナは強請タカリですよ。お前達は払ってくれ、なんですよ。もう、ずうっと貰っているだけじゃなくて、払い戻せばいいじゃないですかと、そういう話が出来ると思います」

富岡「日本の国会議員は、みんな、これです(手を擦り合わせる仕草)」

モーガン「そうですかね」

富岡「スーツ着てない奴らに」

モーガン「ねえ、あいつらは、もう失礼なんですよ。失礼です。それから日米合同委員会の解散」

水島「何故、あれはコソコソやるのかね。本当に自慢なら、しっかり国民に言って今度の6千5百億、また更に追加して3兆円ぐらいになりますとか言えばいいのにねえ」

モーガン「ほんとに」

水島「言ってみろと」

モーガン「詐欺師ですよ。ペテン師ですよ。Worldwideのペテン師ですよ」

矢野「支援額の半分は全部、賄賂とか汚職で消えていますからね」

水島「いやいや、そうなんですよ」

モーガン「そうでしょうねえ」

矢野「それをDOGEが開示したんです」

モーガン「グレンコが認めているんですよ、こいつが認めています。やっぱり腐敗が多いですよ、認めている訳です(苦笑)」

水島「59%しか行ってないってね」

モーガン「それでも、お金くれ、お金くれ。このような道德観の無いやつらは、もっと、反省して戴ければと思います。それから日米合同委員会の解散です。あの旧統一教会の解散命令は出来るんですけど、日米合同委員会の解散命令は…、あとは…」

矢野「日米安保ね」

モーガン「そうですよね。あとは日本語の美しさ。最近、私の耳に入っている日本語は、汚い言葉ですよ」

水島「そうですね」

モーガン「特に若い女性が喋っている日本語は酷い言葉ですよ」

水島「うん」

モーガン「昔の日本語がとても美しかったですよ」

水島「うん」

モーガン「私は外国人で、当然、私に言われたくないと思いますが…」

水島「いや、おっしゃる通りですよ」

モーガン「日本語って非常に美しい言葉ですよ。非常に」

水島「はい」

モーガン「言葉の魂ね、その言霊を取り戻せば、やっぱり魂が踊るじゃないですか」

水島「うん」

モーガン「あとは修学旅行ですか。京都とか奈良はいいんですけども、お寺とかに行って修行すればいいんじゃないですか。本当に神社まで行って、お祈りをすればいいと思います」

水島「うん」

モーガン「教会まで行って見学すれば信仰の世界ですよ。人々が自分を超える存在を信じているよと。そのような教育が必要。最後2点です。子供の道徳観」

水島「うん」

モーガン「これが本当に急務です」

水島「うん」

モーガン「子供の道徳観が意図的に、ぶっ壊されています」

水島「そうですね」★

モーガン「テレビをつける度に本当に嫌な事ばかりで、あの変なダンスをやっている。それは悪いけど、アメリカと韓国の影響で、日本の子、若者が非常に変な方向に走っている訳ですけども…」

水島「そうですね」

モーガン「昔の舞踊とかは美しいですよ。あの蛇になったみたいなダンスじゃなくて」

水島「(笑)」

モーガン「人間ダンス。あのヒップホップとかブレイキングは何だ。あれは、一つの病気じゃないですか」

一同「(苦笑)」

モーガン「お前ら、痙攣、起こしているんじゃないの？」

一同「(笑)」

モーガン「そのブレイキング、もっと、いい舞踊をすれば、それで、子供が、もっといい方向になる訳です。学校の中でL G B T教育とか性教育とか、それは完全に性虐待ですから、そういうことをする先生を今、逮捕すべきだと思うんですよ」

水島「うん」

モーガン「この国は3歳児、4歳児に対して男が女になれるとかセックスのやり方とか、幼稚園とか小学校とかでは、その先生を逮捕すべきだと思います。最後です。ヒーローが必要です。一人でもいいです」

水島「うんうん」

モーガン「一人でも立ち上がって。あと、原口先生が、あのようなことをおっしゃって、私の知っているアメリカ人が涙を流して、このようなヒーローは居るか」と

水島「うん」

モーガン「日本で一人だけでも全世界が響くんですよ」

水島「う～ん」

モーガン「原口先生という人を知らなかったけど、この様に本当の事をおっしゃる勇氣」

水島「うん、うん」

モーガン「やっぱり全世界が響いたんですよ」

水島「うん」

モーガン「日本国内では、私の知り合いでもヒーロー。自分の身を捨てる覚悟をしているヒーローが現れれば、この日本にはチャンスあると思います。それが本当の独立のチャンスだと思います」

水島「そうですね。はい。有難うございます。たまたま私は、ずうっと長くテレビや映画のシナリオライターをやっていたから解るんですけど、丁度、1974～5年ですかね、この辺りから、私がシナリオを書いて解るのは、それまでは女性が、そうだわとか、何々だわとか、こういう言い方をした。そういう言葉が一切、無くなって、私も体言止めにしちゃってね、前の言い方をやめちゃって、時代に合った台詞っていうのは、女性がそうだからあとかね、男言葉っぽいのに、まず男女の区別の微妙なニュアンスが全く無くなってっていうのを、私も自分で書いていたから、やる、とかね、そうするわけじゃなくて、そうする、私ってね、こういう風に言葉自体が高度成長経済になって行く時かな、この辺りから、女性の何とかが言われていたけども、フェミニズムが始まる頃ですね。

この頃から、そういう私も自分で書いていたから判るけど。そういう言葉になりましたね。テレビのシナリオの台詞っていうのは、みんな、そういう形か、それでないと、もう何とかだわとか言っていると、何か凄く遅れた、時代と合わない感じがしてきて、まず言葉自体がそこで変わりましたね」

モーガン「テレビは猛毒ですよ。本当に猛毒なんです」

水島「うん、全くそういうことでね」

モーガン「猛毒です、本当に」

水島「言葉自体が凄く痩せ細って来ているっていうね。スマホをやっている人達の語彙は200語だって。基本語として使われているのが200語以上、あまり出ないという恐ろしい話でねえ（失笑）、それから読書してないっていうね、スマホは見るけど読書はしないっていうね、これが、この間、何方か、モーガンさんだったかな。モスクワの地下鉄の駅や電車でロシア人が全員、本を読んでいる」

モーガン「あ、この間、ここに座っていらっしゃった女性の方です。ロシアの方です」

水島「ああ、彼女か」

モーガン「そうです、そうです、そうです」

水島「私も、あとで写真を見て確認したんですけど、いや、これが今のロシア人だというね。それで私が聞いたんだ。まだプーシキンとかドストエフスキーとか読まれているのかと。そうしたら当たり前ですみたいな感じで、全員、読んでいますと。やはり、この辺は、残念だけでもね、そういう意味での若い人達の読書習慣っていうのが無くなっているとかねえ。

それと子供に道義心とか、そういうものを教える奴が居ない。こういうようなことも凄くあると思いますね。はい。ということで、もう時間が無くなりましたので一言ずつ纏めて戴いて終えたいと思います。じゃあ、まず、矢野さんから独立への道を」

矢野「日本人のアイデンティティに、日本人とは一体、何かという問題を一言で言えば、私は無私の精神だと思うんです。自分を殺せると。それは何故かと言うと、日本の国というのは建国以来、皇室を中心とした命の縦の繋がりにあって、それは各地域、それぞれの家の中に先祖が居て、千年、遡れば10億人の先祖が居る訳ですよ」

水島「そうですね」

矢野「一人一人に」

水島「はい」

矢野「ということはねえ、日本人っていうのは、みんな、家族です」

水島「そうですね」

矢野「何処かで血が繋がっている。だから、そういう実感が、或いは、実態としてもあるから一つの大家族国家だと」

水島「うん」

矢野「だから自分を捨てて、その命の繋がりを継承出来るんだったら、いつ死んでもいいと。だから、いざとなれば特攻隊の様な戦い方が出来るし、それから、それぞれの家々が世界一長寿の寿命、長寿企業が多いんですけれども、これは家業というものを、自分の代で絶やしてはいけないと」

水島「うん」

矢野「そこはねえ、もう損得、利益の問題じゃないですよ。例え損をしてでも、まあ、色

んな芸事でもそうですけど、自分の代で絶やしちゃいけないという使命感というものがあって、これをあとに繋がなきゃいけないと。この縦の繋がりに対する確固とした信頼感と、その使命感というものが、この日本というのを成り立たせていて、個々人という考え方は、そもそも日本人には無い。だから平等とか自由とか言っても、それは、あくまでも借り物であって、例えば、分を知り、分を尽くすとか、職分を尽くして、その道を究めるとか、それが日本人の生き方だと。

人を羨むんでなくて、自分の与えられた分というものを尽くすということで、職人芸も出て来るし、物造りも出て来るし、色んな芸事も出て来る。そういう生き方を日本人はして来たはずですよ」

水島「そうですね」

矢野「だから、それを取り戻すことは大事で、それを端的に示したのが『教育勅語』だと思うんですよ」

水島「うん」

矢野「だから、やはり人間関係の基本というものを、その親子関係、更に君臣の関係って。これは君臣というのは社会制度での代弁詞、言い換えた言葉ですよ。だから、命の繋がりを、ずう～っと遡ると、結局、日本人に於いては皇室に帰っていくと。それは皇統の尊い血筋だから尊ぶんであって、能力じゃないんです。だから続く訳ですよ。更に、そういう感覚が日本人には元々あって、その考古学の、例えば会沢正志斎の『新論』なんて読むと、そういう風書いているんですけども、それが本来の日本人の考え方であり、価値観であり道徳観の基本だっていうこと。

だから、今でも清潔で安全で、みんなが秩序だっているのは、そういうものが自ずと血の中にあるからですよ。だからお互いに家族同士だから、人に迷惑かけられないと」

水島「うん」

矢野「だから世間様に笑われるようなことはしないということが基本で、そういう社会というものがあると。だから、日本人自身が自分達の足元を振り返れば、そういう道徳律がある訳ですよ。17条憲法以来。それは一人一人がみんな、自分は凡夫であって、ただの人なんだと。別に神様でもないし、悪魔でもない。全面否定するものでも全面肯定するものでもないし、みんな、それぞれ至らないところのある人間同士なんだという、そういう連帯観とか平等観っていうものが日本人には生まれながらにしてあると。

それから、自然の中の一部の中に人間でしかないという、人間と自然の関わりというものがある訳で、そういった自然観とか祖先霊を敬い、皇室を敬うという精神が日本人の本来のアイデンティティなんだと。だから、そこをね、もう一度、掘り起こすというか反省して、それを再開発すればいいんです」

水島「そうですね」

矢野「他に求める必要なんか全く無い。だから明治以来、とにかく日本が生存をかけて、欧米に力の支配に対して対抗していかざるを得なかったから、仮の姿として、今、やれ人権だ何だっていうことを言っていますが、それは、あくまで仮のものであって、日本人の本来の強さも生き方も全て足元にあると。日本人自身を振り返る事だということです

ね」

水島「そうですね。丁度、禅学者の鈴木大拙が、私が無ければ、皆、私っていうね、この感覚は今、無心の精神っていうことをね…」

矢野「だから無心の精神ですね。諸法は無心」

水島「だから私を無くすと、みんな、私になると。仲間も敵もって、こういうね。これ、日本人的な本来の在り方ですね」

矢野「そうですね」

水島「はい、では、富岡さん、お願いします」

富岡「今、矢野先生がおっしゃったように、絶やしてはいけないというのは凄く大事なことで、だから、この30年、新自由主義とグローバリズムの中で日本人が色々なものを断絶させてしまったっていう、そういう反省がありますね」

水島「うん。そうですね」

富岡「さっき組合のお話をしていましたけど、やっぱり組合なんかも一つの間共同体としては、非常に重要な社会の役割を持っていたと思いますね。だから、そういうのが、どんどん壊れて、あとは中小企業とかね、これですよ。これも税制の問題で壊れて来ているし、だから、やっぱり、そういう歴史の連続性って言うか、生きる一つの時間の連続性って、やっぱり絶やさないっていうね」

水島「うん」

富岡「これは、やはり凄く大事な事で、今、一番、危ないのが、さっきお話していた日本語ですよ」

水島「そうですね」

富岡「本当に、うん」

水島「本当にそうですね」

富岡「水村美苗さんが『日本語が亡びるとき』っていう本で…」

水島「うんうん、書いていましたね。私も読みました」

富岡「もう随分前に警鐘を鳴らしていましたが、世界で、この3つの文字を持っている、そして、この長い千年を超える文学の伝統を持っている、そういう言葉ですよ」

水島「うん」

富岡「言葉を失えば、もう全てが終わってしまうので、まあ、そういう意味では、一番、絶やしてはいけないのは、日本語の伝統ですけど、まあ、ほんとに学生を見ているとスマホです。スマホしか見てないっていう これはねえ、本当に…」

水島「ああ、そうですねえ」

富岡「今、大学生になっている世代は、生まれた時からスマホ世代ですから」

水島「そうなんですよねえ」

富岡「だから１０年前の学生と違うんですよ」

水島「う〜ん…」

富岡「まあ、明らかに変わって来ています。これは本当に大事な事、重大な危機だと思いますね」

水島「ああ…」

富岡「うん」

水島「明治以降の文学も、もう古典になっちゃっているんですね」

富岡「そうですね」

水島「彼らはねえ、読むのをね」

富岡「読めないんですよね」

水島「読めないでしょうねえ」

富岡「うん」

水島「はい。有難うございます。では、原口さん」

原口「はい。日本語の危機と言え、やっぱり日本語を支えて来た農村文化。農業の危機でもあるんですね」

水島「そうですねえ」

原口「さっき国会で、農水大臣が備蓄米放出しても価格が下がるんって言うので謝っていますけど、そんなの今、始まった話じゃないんですよ」

水島「うん。そうですよ」

原口「どんどん農業を虐めて、そして直接支払いも無くす、個別所得補償も無くす、で、大規模化すればいいとやって来て、今、耕作放棄じゃなくて相続放棄が３割ですよ。だから、これを御覧の皆さんに、生きる糧を、まず一番、大事にする。食べるっていう事」

水島「うん」

原口「作るっていうこと、自分達が生産者であるっていうことを手放さないっていうことですね。その為にはジェイソン・モーガン先生がおっしゃっている様に、やはり学ぶことが大事ですよね」

モーガン「(頷く)」

原口「学びが。自分の国の歴史を学び、地域を学べば、自信が湧いてきます。どれだけの先達が頑張って来たか」

水島「うん」

原口「そして、この国が世界の中で果たして来た役割も、アーミテージさんが亡くなったというんで、僕は本当に象徴的だなあと思うのは、アーミテージさんが日本に来た時に、自民党の政治家達は彼が言う Show the Flag, Boots on the Ground に屈する訳ですよ。

僕はその時、自民党の青年局長だったけど、何故、あの人の言うことを、ははあ～って言うんだと。青年海外協力隊をお創りになった末次一郎先生でしたか、何故、青年海外協力隊のことを言わないんだと。それで金だけ出して血は流さないとか、ふざけるな、帰れと何故、言わないんだって」

水島「うん」

原口「自民党本部に殴り込んだら、お前は何処の田舎の県会議員だとか言われてですね、ほんとに（笑）」

一同「（笑）」

原口「いや、田舎で悪かったね（苦笑）、何て言うかなあ、やっぱり拝米保守なんです」

モーガン「そうです」

水島「うん」

原口「うん。拝米保守だと思っていたら、今度は、アメリカなのにトランプさんのいう事を聞かないんですよ」

一同「（笑）」

水島「拝米じゃないんだよね」

原口「拝米じゃないよ、拝ディープステイト保守ですよ」

モーガン「拝ワ保守ですよ。拝ワ保守」

原口「そうそう、そう」

一同「（笑）」

モーガン「拝ワ保守です」

原口「そう」

水島「ほんと、そうだね」

原口「だから、さっきの選択的夫婦別姓も、本当は戸籍制度とか無くしたいんでしょ」

水島「うん。戸籍ですね」

原口「ええ。日本人になるっていうことを消したいんじゃないですか、日本人になったということ」

水島「うん」

原口「そういったことを考えてみてもLGBTQもそうだけど、自分は、同一性が違うんだったら態々男とか女じゃなくて、別のものでいいじゃないですか、別のカテゴリーで。

それをアメリカのバイデン政権みたいに、ぎゅうぎゅうに押し込むから、色んな所で歪みが出るんですね。ただ、僕は、今回の参議院選挙も含めて、都議選と重なる年が、12年に1回です」

水島「ああ、今回、そうだね」

原口「めちゃくちゃチャンスで、この間、深田萌絵さんが国民は増税農場の家畜みたいに扱われていると」

水島「うん」

原口「もう、それは取り過ぎていますよ。この間、富裕層は1億円以上、超富裕層は5億円以上の人が物凄く増えていて、その人達は700兆円、持っているんですよ。1%払って貰っていいじゃないですか」

水島「うん。だから、さっき累進課税の話したけどね、もうねえ、大金持ちに優遇し過ぎですよ」

原口「優遇し過ぎです」

水島「はい」

原口「しかも悪い人達が、消費税を使って金儲けしている訳だから」

水島「そうなんですよ」

原口「だから消費税は廃止一択なんですよ」

水島「うん。そうですね」

原口「だから、そういう意味でも、その連合を創るチャンスですね」

水島「ああ、だから消費税廃止連合でねえ、それを賛成する議員には入れてね」

原口「ええ」

水島「どこの党派でもいいから」

原口「あとは全部、落ちて貰うと」

水島「そう。というぐらい、本当にドラスティックにやる方がいいかも分かんないという感じがしますね。はい、有難うございます。では、掛谷さん、お願いします」

掛谷「はい。私は日本と西洋は違うと言いながら、保守っていうので共通部分って何かって言うと、個々人が判断を間違うと。だから、そこに対して謙虚であれっていうところは、やっぱり共通していて、だから、その時に個人に対して西洋だと、それで神をおいて経常的ににおいて、だから自分は間違うと。日本は、それをどうするかって、まあ、明治維新の時に、それで、さっき言った丸山さんもそうだし、あとは、最近なら井沢基樹さんもおっしゃっていますけど、その天皇っていうのをおくことで、それを神格化してしまったと。

だけど歴史的に見たら、日本って別に天皇って、そういう存在じゃなくて、もっと尊いけ

ど身近な存在なのを明治維新でそうしてしまった。だけど、じゃあ、日本で何を神に相当するものにおくかって言った時に、これまで何回も出ていますが、やっぱり英霊なんじゃないかなあと私は思うんですね。

実は、今回、科学者の魂は腐っているって何回も言いましたけど、その中でコロナの問題で損な役目を執りながら本当のことを言ったって、宮沢先生は、この番組にも出て京大をクビになりましたけど、あと新田先生、私の3人が共通するのは『英霊の言の葉』を読んでいるっていうことが共通点だったってことで。やっぱり、そこは一つ、あり得るんじゃないかなあと」

水島「うん」

掛谷「やっぱり亡くなっている存在なので、そういう意味で言うと、色々と天皇を神格化させる時のような問題は無いかもしれない。私には子供が3人居るんですけど、その内の一人が最近、鹿児島に旅行に行ったと家内から聞いて、ああ、鹿児島へ行くんだったら知覧へ行けて勧めれば良かったなと思っていたら、息子が帰って来たら言われることも無く知覧へ行ったらいいんですよ。そうしたら、若い人が沢山、居たって言っていたんですね」

水島「うん」

掛谷「それで卓球の早田ひな選手も、アンパンマン・ミュージアムと知覧に行きたいって言っていましたね」

水島「ありますね」

掛谷「だから、今、若い人はスマホだ何とかって色々批判はありますが、その話を聞いて、私は霞ヶ浦の予科練と、約束の跡地と靖國へ行ったことがあります、未だ知覧に行ったこと無いんです。今の若い人がそんなに集まって行っているというところは、やっぱり希望だと思います」

水島「そうですねえ」

掛谷「あと、最後に日本語って言った時に、私は、それこそ先の大戦で亡くなった兵士って、一般の人でも和歌を詠んでいますね。私は日本語を取り戻すのは、みんなが和歌を詠むことだと思います。美しい日本語の基本は和歌だと思うので、だから、今、何か俳句甲子園みたいなのをやっていますけど、やっぱり俳句は、どうしても風景なので、心情を詠むっていう意味で言うと、みんなが、もっと和歌を詠む。私も時々下手くそな和歌を詠むようにしているんですけど、やっぱり和歌の復活が日本語の復活かなあとと思っています」

水島「おっしゃる通りで何処もそうですけども、あの五七五七七のリズムね。これはね、丁度、今日、午前中に馬淵さんと話した時、ウクライナ大使の時代、ウクライナ語の詩、英語の詩、それから日本語の詩、原文は日本語ですよ。これを、みんな、読んだそうですよ。そうしたら日本語の意味は全然、解らないはずだけど、涙を流したって。こんなに、美しい言葉は無いって。つまり多分、歌心で各国の王族は居るけども、全員、詩人なんですよ、最初から神武天皇以来、皇族の方は、みんな、歌を詠む。この歌心っていうのは、日本語の基本的に、今、おっしゃるようにベース、本質にあるんですね。

だから言葉自体が美しく感じる、まあ、フランス語も、よく美しいと言われるけど、日

本語の五七五のリズムや、そういうものっていうのは、本当におっしゃるように、そのところを、我々は思い出さなきゃいけないっていうか、ほんと、そこは思いますね」

掛谷「この番組でも歌会をやってみたらいいかもしれませんね（笑）」

一同「（笑）」

水島「いやいや、いや、ほんと、そう思います」

掛谷「ええ」

水島「それと言葉でね、漢詩もそうですけど、日本語で書下ろし文って言うか、読み下し文ってあるじゃないですか。あれもリズムになって日本語になっているんですよ。漢文なのに、こういう響きとか、こういうの、どうしても音読っていうのが実は必要で、多分、皇室の歌会始というのも、ああ～はるお～お～ぎい～てえ～とかなんてやるじゃないですか。あれも本当に何を言っているか解らないかも分かんないけど（笑）、綺麗だと。歌舞伎も能の謡も今、聞いている人は殆ど解らないと思うけど、でも、ああ、人の命はこういうリズムなんだと。

無常とかそういうのも、こういう感じになるんだ、みたいなねえ。いや、手前味噌の日本語をやたらと褒める訳じゃないけども、ただ、おっしゃるように、そういうところがあると思いますね」

掛谷「（頷く）」

水島「音楽性みたいな、そののところを思い出して良い事だと思いますねえ。和歌を詠ませるのは本当にいいと思いますよ」

掛谷「この番組でやりましょう（笑）」

一同「（笑）」

水島「ああ、それとねえ、今、『英霊の言の葉』見ると、特攻隊の皆さんがみんな、上手い下手は、ともかく、みんな、残しているんですよ」

掛谷「はい、そうですね」

水島「それでね、何かって言ったら大体、本歌取りとかなんですけどね、でも、これは、まねびつって言ってね、学びっていうのは日本語で言うと、実は、これは本居宣長のあれですけど、まねびなんです。まず、真似なんです。まず、それを真似して、それから自分の独自のものをつくっていくっていうね、この流れを、本当に子供達に何とかしてあげたいと思うんですよ。でも、いいですね、和歌の会」

掛谷「やりましょう（笑）」

水島「そうですか」

一同「（笑）」

水島「下手っぴいと言われてもいいからね。はい。では、施さん」

施「いや、また、そうですね、皆さんのお話を聞いていると、また話したいことが（笑）」

一同「(笑)」

施「色々出て来てしまっって、そうですね、和歌の会、いいですね。京都大学の、もう引退なさいましたけど、佐伯啓思先生はゼミで、年明けた最初の授業で毎回、和歌を詠む会をやっていたという」

掛谷「いいですね」

施「何か、そんなこともありました」

水島「ああ、いいですねえ」

施「はい。私は、今日、皆さんのお話を聞いていて思ったのが、やはり、日本の精神っていうのは正に時間軸って言うか縦軸」

水島「そうですよねえ」

施「垂直の意識というか、やっぱり、そこだと思うんですね。過去を亡くなった人の向こうの無数の先祖、先人の意識っていうものを感受して、それから今を生きる我々が、何をやっていくべきかという、やはり、これが日本の一つの大事な倫理観だと思うんですね」

水島「うん」

施「正に英霊と言うか、あの知覧とか、何かそういうのも大いにあると思うんですけども、いや、その精神っていうのは正に今でも生きていますね。去年の夏、高校生と話している時に、最近、一番、印象に残った映画は何かと聞いたんですよえ、別に普通の高校生ですけど」

水島「うんうん、うん」

施「そうしたら、結構、みんなが口を揃えていたのが、私は観ていなかったんですけど『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら』と、これは、やはり特攻隊の…」

水島「ああ、そうですか。うん」

施「知覧の特攻隊を描いた映画だったんですねえ。みんなが口を揃えてというぐらい言っていて、ああ、やっぱり、そういう特攻隊の歴史、知覧に行って涙を流す、落涙するっていう、そういう精神っていうのは未だ未だ全く残っているんですね」

水島「うん」

施「だから、それが未だ途絶えない内に、日本を立て直さなきゃと思うんですね」

水島「そうですね」

施「やはり、その時に私は家庭と地域社会っていうのが、そういう日本人の感覚を伝える場だと思うんですね。ですから、これを維持発展させるような政策っていうのを、是非、執って欲しいと。だから、これは言い換えれば、庶民を豊かにするっていうことだと思うんですね。庶民が中心となる経済を取り戻すと」

水島「うん」

施「これは色々悪いところもあったでしょうけれども、新自由主義以前の一億総中流と言った昭和の調整型の政治ですね。これの良い所って言うのは、もう一遍、やっぱり見直すべきだと思いますね。それで富岡先生もモーガンさんもおっしゃっていたように、例えば、労働組合とか、そういう中間共同体みたいなのが、やっぱりちゃんと見直さなきゃいかんと」

水島「うん」

施「労働組合、あとは農協、漁協みたいな協同組合、業界団体、地域団体、アメリカだったら教会とかでしょうし、そういう宗教的なものも含めて、やはり、そういうものが無いと、一般庶民の声っていうのは絶対に政治に反映されないんですね」

水島「うん」

施「一般庶民の声っていうのは、バラバラだったら絶対に政治に届かない訳ですね。ですから中間団体って、やっぱり必要で、それがしっかりして、初めて、そういう庶民の声が政治家に反映されるということだと思うんですね」

水島「うん」

施「ですから、もう一遍、そういう調整型の政治を見直して欲しいと。そのトランプ派を支えている新しい保守、まあ、ヴァンス系列の人達っていうのは、割とそこら辺、よく解っているというか、共和党なのに、労働組合重視の人っていうのは、結構多いですね。

そういう中間団体を復活させて、その間を、まあ、政府が色々意見を聞いて公平な配分っていうのを心掛けていくんだっていう、ですから、そういう意味でのトランプ政権のそういう部分と是非、連携して、そしてヨーロッパにも、そういう考えの人とか結構、居ると思うんですね。

正にさっきのメローニさんにしても、そういうのと連携をして、もう一遍、このグローバル企業、グローバル投資家の手から政治を取り戻すという方向。そういう風な一種の保守の連携みたいな形で、国際的にそういう連携をとっていく必要があるのかなあっていう感じがしますね」

水島「なるほどね」

施「ええ。そう思います。これは保守の連携っていうのは、あまり何かあり得ないような感じもするんですけど、何か、これは一遍、京都大学の柴山圭太さんから聞いた話ですけども、実は、その保守の連携っていうのは、感覚的に上手くいくんじゃないかというようなことを柴山さんがおっしゃっていて、例えば日本の農村の農業の人とアメリカの農業の人が交流する機会っていうのがあったんだと」

水島「うん」

施「勿論、お互いに言葉が全然、解らないけれども、ただ、やはり同じように、その土地に根差して農業をやっている人っていうのは、何か分かり合えるところがあって、言葉は通じないけれども何となく交流が進んだみたいな、そんな感じだと思うんですね」

水島「うん」

施「ですから庶民同士の連携っていうのは中々難しいですけども、やはり、みんな自分の地域が大切だと。地域に根差して暮らしたい。家族地域を大事にしたい。そういう感覚というのは、実は分かり合えると思うんですね。そういう連携というのを、これから探って行って、そういう、所謂、グローバル・エリート的なものから政治を取り戻す。何か、そういうことを、実はトランプと連携してやって欲しいなと思いますね」

水島「そうですね」

施「ええ。はい、はい」

水島「おっしゃる通りだと思うんだけど、産経新聞さん始めとするグローバリズム自称保守というのが居る訳ですよ」

施「(失笑)」

水島「こういう人達と反グローバリズムを言っている我々と、じゃあ、どうやって連携するんだと。今、敵同士みたいな感じになっている訳ですね。だからヨーロッパとか日本とかグローバリスト達と戦っている側としては、そうなると私なんかは、さっき原口さんが言ったけど、例えば、消費税ゼロ連合、まあ、自称保守の産経新聞系の人でも、消費税ゼロというなら、そこのところだけで共闘は出来ると。あとは全然、駄目だけどね、という風にしかないかなあという気がしているんですけどね。現実的に選挙が近いからね。

よく私のところに言って来る人が居る訳ですよ、みんな、保守は大同団結しなきゃいけない、社長は、もっと大きな心を持ってと言うけど、申し訳ないけど、どうやったら拝米保守の人と仲良く、ああ、別に仲良くはしているんですよ。個人的に喧嘩している訳ではないけど、だから、ここのところで個別の政策ぐらいしかやれないところがあるんですけどね、モーガンさん、そういう意味では難しいところですね」

モーガン「はい。拝米保守は一人一人引きずり降ろすしかないと思います」

一同「(笑)」

モーガン「敵です。もう、いくら重なっているところがあるとしても敵ですよ、あれは、保守を装っている一番、嫌な敵ですよ」

水島「そうです」

モーガン「本当に」

水島「本当は、そこですね」

モーガン「はい」

水島「まあ、続いて一応、纏めの言葉を」

モーガン「有難うございます。民からいいことが来るという話があったんですけども、私が前から気になっているところがありまして『日本の真の独立を目指す有識者会議』ですが、矢野先生も御出演されるイベントが、27日の日曜日に開催されますので、これを一応、色んなところではいい動きがある訳です。

日本が独立する。それは確実だと思います。それはチャンネル桜が長年、頑張ってきた報

いとして、日本が独立すると思います。保守の連携というのは、私はB R I C Sじゃないかと考えています」

水島「うん、そうですね」

モーガン「保守っていうよりも保守とか右と左とか、あくまで人工的な政治っていうか、不自然的な政治っていうか、全世界の常識は大体、B R I C Sの諸国の常識じゃないか」

水島「うん」

モーガン「石田さんがおっしゃっている、世界の9割ぐらいが極右、みたいな、私も極右ですよ。私の婆ちゃんも極右です。何処の国でも常識のある人が殆どで、まあ、B R I C Sが、そのような連携じゃないか。国民レベルでは何が出来るか。2点と政治が何が出来るか。先程、出たりチャード・アーミテージとか、あの人は旭日大綬章を受賞しているんですよ」

原口「(笑)」

水島「そうですね」

モーガン「クリス・メイも旭日章」

水島「ああ、メイもそうですね、はい」

モーガン「政治家に頑張って戴いた、それを撤回する」

水島「うん」

モーガン「あの章は、もう、あんた達にあげない。それは天皇陛下に対する侮辱です」

水島「うん」

モーガン「クリス・メイってジェノサイドの人が天皇陛下から章を受章するっていうのは、僕にはブラックジョークに見えるんですよ。政治家が頑張って、それを直ぐやめるって」

水島「うん」

モーガン「国民のレベルで何が出来るか。まず産経新聞とか正論とかの購読をやめましょう」

原口「(笑)」

モーガン「もう今、電話していいと思います。今、電話して、もうプロパガンダはいいんです。お断り。他の新聞もそうじゃない？ポダム新聞とかチャイ日新聞とか夕日新聞とか全部、プロパガンダですよ。全部、やめましょう。新聞とかNHK、ぶっ壊して自らが、プロパガンダを購読するって、おかしいですよ」

水島「うん」

モーガン「ニューヨーク・タイムズを購読している人と同じです。最後、何が出来るか。国民レベルでは、本当に若者は指導を求めているんですよ。もっといい未来が見たいので

すよ。本当に、みんな、そうだと思いますよ」

水島「そうですね」

モーガン「こんな世の中じゃあ、おかしいと、みんな、肌で感じていると思います。だから、若者が近くに居れば小学生とか中学生、高校生、大学生でも一緒に神社に行きませんか」

水島「うん」

モーガン「一緒にお寺に行きませんかとか。一緒に靖国神社、参拝しませんかとか、一緒に田植えをしませんかとか、そのような日本の文化を少しでも紹介すれば、その人の救いにもなると思います」

水島「うん」

モーガン「そうやって周りの若い人々を意識して救ってあげて下さいというのが私の願いです。以上です」

水島「はい、有難うございます。では、川口さん、お願いします」

川口「はい。独立に必要なものって言って、いつも私の書いていることですけど、まず、食糧の自給、エネルギーの自給で、それから、あとは国防を充実させて自分達の力で守れるようにすることとかって言っているんですけど、日本はどれも出来ていないと。

ドイツも出来ていなくて、特にドイツの場合、エネルギーは自分で壊しちゃっているみたいな、もう、とんでもないことになっています。それで、何を言い出しているかって言うと、だから信頼できるパートナーが大事なんだとかって言い始めるんですけど、まず、そのパートナーは大事だけれど、信頼できるっていうのが、まず、そこで何か間違っているのではないかなあと。

利害を共通できるパートナーを探すっていうのは、いいことだと思うんですけど、まあ、そこら辺のところが日本もドイツも何か凄く甘くて、独立国家になっていないんじゃないかなあっていう風に思っています」

水島「うん」

川口「それでドイツが今、独立のチャンスだっていう声もあるし、日本でも、やっぱり、今が独立のチャンスで国防の軍事、防衛費を増やして、これで本当の独立にもっていきましようっていうような声があるんですね。私、それはいいことだと思うし、やった方がいいと思うんですけど、ただ、何か、これって、またディープステイトの、いつもの作戦のところで、作戦じゃないかなと思われるところが凄くあって、だからドイツはアメリカがNATOから抜けてしまっって守ってくれないかもしれないとか、あと、もう直ぐプーチンの戦車がベルリンに迫ってくるかもしれないとかっていう、何か非現実的な恐怖を煽るみたいな感じで、だから、今、国防費をと言っって、軍事費を凄く増やしてやっていこうと思うんですけど、これに、やっぱり乗っちゃ駄目だと思うんですよね。

軍事、国防をちゃんとしていくっていうことはいいかもしれないけど、何か煽られて、そっちに靡くっていうのは、恐らくディープステイトが今迄は脱炭素でやっていたんだけど、これなんか上手くいかなかったから、だから今度は軍事の調達の方でやろうと

しているみたいな風に見える時があって、だから軍産共同体プラス官、政府、それからメディアが一緒になって、そういう風に国民を煽って、とんでもない方向に持って行って、最終的には自分達の金儲けみたいになって、ちっとも国力を充実させるとか国民を幸せにするとか守るとか、そっちに繋がらないような気がするんですね」

水島「うん」

川口「ですから、要するに騙されないで、まず、政府の言っている事とかメディアの言っていることを、しっかり疑うと。それが今、一番、大切なことじゃないかなと思います」

水島「そうですね」

川口「それと、あとは、また他力本願になっちゃうんですけれど、先程、ヒーローが必要だっておっしゃった方がいらっしゃいましたけど、私も本当に、これ、他力本願で待つしかないみたいなのところがあるんですけれど、愛国心と、それから勇気。そして知恵のある、そういう政治家、ヒーローたる政治家が現れるのを、私は切望しています（微笑）」

水島「はい。はい、どうも有難うございます。今日は『真の日本の独立への道は？』ということで、皆さんに色々お話を伺いましたけれども、本当に、今、そのまま川口さんが言ったように、単に通常兵器で、何かね、段々アメリカから武器を買ってやったって、別に何も無いというね、私は矢野さんが言っている様に、選択と集中という形で、核武装、私から言えば核武装が一番、いいんですけれど、ただ、そうじゃなくても原潜を造るとかいっただけで、それから、もっと言えば言葉的に言えば、我々の国は、もし、中国が尖閣諸島を占領するようだったら、我々は即座にNPTを脱退して核武装するとか、金を使わないでも出来ることはいくらでもあるということも含めて、国防安全保障の問題は本当に啓発していかなくちゃいけないかなと思います。

それと、さっき組合の話を書いてくれましたけど、私は本当にサンディカリスムっていうのか、こういったものを、私は、もう一回、検討し直してもいいんじゃないかと。マルクス主義でもあれでもない協同組合主義っていうのかな、まあ、アナルコサンディカリスっていうのはアナキズムの典型で、昔、バクーニンって、私は一生懸命、どんなもんかっていうのを研究したこともありましたが、そういうことも含めて、もう一回、政治の在り方を考えていくこともあっていいんじゃないかと思っています。日本型とは何だろうっていうことでね。はい。今日は有難うございました。以上で終わらせて貰います」

一同「(礼)」

\*\*\*\*\* お わ り \*\*\*\*\*